

多賀城市内の遺跡 2

—平成27年度ほか発掘調査報告書—

新田遺跡 山王遺跡
市川橋遺跡 西沢遺跡
高崎遺跡 留ヶ谷遺跡

平成28年3月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡や、多くの埋蔵文化財包蔵地があり、それらは市域の約1/4にも及んでおります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であり、当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用に努めているところです。

本書は、平成26年度と平成27年度に国庫補助事業として実施した15件の発掘調査の成果を収録したものです。そのなかで、新田遺跡第103次調査では、奈良時代の堅穴住居跡、第105次調査では、中世の堀跡を発見しました。また、山王遺跡第151次調査では、南北大路から西へ6条目の南北道路東側に面するところで、道路に近接して掘立柱建物跡を発見し、平安時代のまち並みの一端が明らかになりました。

いずれの調査も、規模としては大きなものではありませんが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、本市の新たな歴史像の解明につながるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成28年3月

多賀城市教育委員会

教育長 菊 地 昭 吾

例　　言

- 1 本書は、国庫補助事業による平成26年度の発掘調査1件と、平成27年度の発掘調査14件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 3 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るために、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。また、本書で報告している調査では、平成23年3月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いている。震災以前の座標値と整合させるために、再測量の成果に基づき、東に約3m、南に約1mの補正をかけている。
- 4 描図中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、『新版標準土色帖』(小山・竹原: 1996) を参考にした。
- 6 執筆担当は、下記のとおりである。図版作成等は各執筆担当者と茂泉光雄、遺物整理員が行った。また、遺物の写真撮影は村上詩乃が担当した。本書の編集は相澤が行った。
I・II・X：相澤清利　III・IX：武田健市　IV：畠山未津留　V・XI・XII：島田　敬
VI・VIII・XI・XIV：石川俊英　VII：村上詩乃　XV・XVI：熊谷　満
- 7 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

| | | | | | |
|------|--------------|----|------|-------------|----|
| I | 遺跡の地理的・歴史的環境 | 1 | XI | 西沢遺跡第27次調査 | 62 |
| II | 新田遺跡第103次調査 | 3 | XII | 高崎遺跡第101次調査 | 64 |
| III | 新田遺跡第105次調査 | 18 | XIII | 高崎遺跡第103次調査 | 72 |
| IV | 新田遺跡第106次調査 | 23 | XIV | 高崎遺跡第104次調査 | 78 |
| V | 山王遺跡第151次調査 | 30 | XV | 高崎遺跡第105次調査 | 80 |
| VI | 山王遺跡第153次調査 | 36 | XVI | 留ヶ谷遺跡第7次調査 | 82 |
| VII | 山王遺跡第155次調査 | 40 | | | |
| VIII | 山王遺跡第156次調査 | 47 | | | |
| IX | 市川橋遺跡第91次調査 | 53 | | | |
| X | 西沢遺跡第26次調査 | 60 | | | |

調　　査　　要　　項

- 1 調査主体　　多賀城市教育委員会　　教育長　菊地昭吾
- 2 調査担当　　多賀城市埋蔵文化財調査センター　所長　板橋秀徳
- 3 調査担当者　　多賀城市埋蔵文化財調査センター
主幹　武田健市　副主幹　島田　敬　相澤清利　研究員　石川俊英　熊谷　満
技師　畠山未津留　調査員　村上詩乃　茂泉光雄
- 4 調査協力者　　柳館陽介　菅野善夫　加藤功　小竹英義　阿部敏明　阿部佳人　鈴木英磨
鈴木悦子　伊藤信子　我妻幸子　佐藤雅義　加藤訓　佐藤さつき　佐藤容子
佐藤喜一　鈴木善　熊谷みよの　菊地和也　菊地キワ子　高橋妙子
(有)山田設計工房　株式会社レオパレス21　タクトホーム株式会社　株式会社建
財社　株式会社百年住宅　(有)ライフケアエナジー　株式会社大成ハウジング
大和ハウス工業株式会社　大成ハウス工業株式会社　セルコホーム株式会社
株式会社建築工房D A D A　株式会社日黒設計

5 調査従事者 涅美静香 阿部純一 阿部信夫 石井慎六 石徹白和人 氏家雅夫 上村 博 小川勝彦 鎌田修一 門脇邦夫 河東美雄 加藤義宏 小松美樹 小針美香 小松まり 西條金三 佐々木一郎 佐藤良雄 佐藤みゆき 佐々木正範 佐々木直正 櫻井良博 斎藤義治 白石三枝子 志賀定夫 須田英敏 高橋正行 高橋由美子 千葉美恵子 戸枝瑞枝 中島 弘 中込弘美 濱田茂樹 平塚孝志 平塚訓章 藤田恵子 福原寛 松川謙二 三浦侑士 山田佐男 矢島恒男 横山治

6 整理従事者 千葉都美 阿部麻衣子 宮城ひとみ 村上和恵 内海美由紀 川名直子 佐藤ゆかり

調査一覧

平成26年度

| No. | 遺跡・調査名 | 所 在 地 | 調査期間 | 調査面積 | 調査担当者 |
|-----|----------|------------|-----------------|-------------------|-------|
| 1 | 高崎遺跡101次 | 高崎1丁目103-1 | 平成27年3月3日～3月27日 | 370m ² | 島田・石川 |

平成27年度

| No. | 遺跡・調査名 | 所 在 地 | 調査期間 | 調査面積 | 調査担当者 |
|-----|-----------|--------------------|--------------------|-------------------|-------|
| 1 | 新田遺跡第103次 | 新田字後27-2 | 平成27年5月27日～6月25日 | 55m ² | 相澤・茂泉 |
| 2 | 新田遺跡第105次 | 新田字後11、11-1 | 平成27年9月29日～10月13日 | 97m ² | 武田・村上 |
| 3 | 新田遺跡第106次 | 新田字北14、14-1外 | 平成27年11月4日～11月23日 | 487m ² | 畠山 |
| 4 | 山王遺跡第151次 | 南宮字八幡143-2 | 平成27年8月27日～10月27日 | 82m ² | 島田・茂泉 |
| 5 | 山王遺跡第153次 | 山王字山王四区191-6、191-9 | 平成27年9月28日～10月19日 | 31m ² | 石川 |
| 6 | 山王遺跡第155次 | 南宮字町48の一部 | 平成27年11月30日～12月18日 | 32m ² | 武田・村上 |
| 7 | 山王遺跡第156次 | 山王字山王二区202-1 | 平成27年12月7日～12月19日 | 89m ² | 石川 |
| 8 | 市川橋遺跡第91次 | 城南2丁目11-5 | 平成27年11月4日～11月25日 | 34m ² | 武田・村上 |
| 9 | 西沢遺跡第26次 | 浮島字西沢90番1 | 平成27年7月13日 | 40m ² | 相澤・茂泉 |
| 10 | 西沢遺跡第27次 | 浮島字沢前21-1外 | 平成27年11月14日 | 15m ² | 石川 |
| 11 | 高崎遺跡第103次 | 東田中1丁目186-1、187-1 | 平成27年11月9日～12月18日 | 223m ² | 島田 |
| 12 | 高崎遺跡第104次 | 高崎2丁目231-14 | 平成27年11月24日 | 12m ² | 石川 |
| 13 | 高崎遺跡第105次 | 留ヶ谷1丁目137-13 | 平成27年12月24日 | 7m ² | 熊谷 |
| 14 | 留ヶ谷遺跡第7次 | 留ヶ谷1丁目15-1 | 平成27年7月13日～8月13日 | 290m ² | 熊谷・石川 |

凡 例

- 1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。
SA : 柱列跡 SB : 据立柱建物跡 SD : 溝跡 SK : 土壙 Pit : 柱穴及び小穴
SX : その他の遺構
- 2 奈良・平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ」(多賀城市教育委員会 2003) に従った。詳細は下記のとおりである。
 - (1) 土師器坏
A類 : ロクロ調整を行わないもの
B類 : ロクロ調整を行ったもの
 - B I類 : ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの
 - B II類 : ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの
 - B III類 : ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの
 - B IV類 : ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの
 - B V類 : ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの
 - B I・B II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り(糸切り)によるものをcとして細分する
 - (2) 土師器甕
A類 : ロクロ調整を行わないもの
B類 : ロクロ調整を行ったもの
 - (3) 須恵器坏
I類 : ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの
II類 : ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの
III類 : ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの
IV類 : ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの
V類 : ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの
I・II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り(糸切り)によるものをcとして細分する。
- 3 瓦の分類は「多賀城跡 政庁跡 図録編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、「多賀城跡 政庁跡 本文編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1982) の分類基準に従った。
- 4 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期存続中に降灰し、承平4年(934年)閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え(宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998)と、『扶桑略記』延喜15年(915年)7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある(町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中山久夫教授追官記念地質学論文集』1991)。当市教育委員会では考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

I 遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南北に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高5～6mの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城や付属寺院の多賀城廃寺と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

新田遺跡は、標高5～6mの微高地に立地し、その範囲は東西約0.8km、南北約1.6kmの広さを有する。绳文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では大小の溝で区画されて屋敷跡が多数発見されている。このうち、寿福寺地区では12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。

山王遺跡は、標高3～4mの微高地に立地し、その範囲は東西約2km、南北約1kmの広さを有する。これまで弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいなどを構成する建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

市川橋遺跡は、標高2～3mの沖積地に立地し、その範囲は東西約1.4km、南北約1.6kmの広さを有する。多賀城跡南面に広く占地し、山王遺跡と同様に古代の方格地割に基づくまち並みが形成されている。

高崎遺跡は、低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西約1.3km、南北約1kmの広さを有する。これまで、古墳時代から近世までの遺構・遺物が発見されている。古代では、多賀城廃寺跡の西側で約80軒の堅穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸跡などが発見されている。また、井戸尻地区では大量の灯明皿が一括廃棄された状況で検出され、周辺で万灯会のような仏教儀式が執り行われていたと考えられている。

西沢遺跡は松島丘陵から塩釜方面に向かって張り出した低丘陵上の南西端部に立地し、東西450m、南北700mの範囲を占めている。これまで、平安時代の堅穴住居跡や大型掘立柱建物跡、倉庫と見られる掘立柱建物跡や鍛冶工房と見られる堅穴住居跡が発見されている。また、中世頃の30棟を超す掘立柱建物跡も発見されている。

留ヶ谷遺跡は、古代から近世までの複合遺跡で、特に中世から近世の遺構・遺物が多く発見されている。これまでの調査では、平場とそれに伴う掘立柱建物跡、柱列跡、土壙跡、溝跡などを検出している。土壙や平場などは中世の館跡に伴うものと考えられ、近世にはこれを改修し武士の屋敷として利用したものと考えられている。

第1図 調査地位置図



II 新田遺跡第103次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、新田字後地内における個人住宅新築に伴うものである。平成27年5月1日、地権者より当該区における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅の基礎工事の際に直径40cm、深さ5.3mの柱状改良を37箇所で施すことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺跡保存の協議を行ったものの、申請どおりの工法で着手することに決定したことから、本発掘調査を実施することとなった。5月19日に地権者から発掘調査に関する依頼・承諾の提出を受け、5月27日より現地調査を開始した。

はじめに、重機による住宅建築部分の盛土・表土（I層）除去から取りかかり、現表土下約1m下のにぶい黄褐色土（IV層）上面で遺構を確認した。29日より作業員を動員し、遺構の平面精査と擾乱の掘り下げを行った。遺構は複雑に重複しており、はじめに最も新しいSD2099・2100・2101溝跡から掘り込みを開始した。SD2100・2101溝跡の埋土には灰白色火山灰が混入していることから平安時代ごろのものとみられた。これらの平面図作成、写真撮影が終了したのは6月8日である。引き続きこれらより古い堅穴住居跡2軒の精査を行う。SI2102は小規模なもので、カマドの煙道下部は残存していたが、燃焼部側壁は壊されていた。SI2103はSI2102よりも古く比較的規模の大きいことが判明した。しかし、いずれも調査区外へと延びており、その全容はつかめなかった。また、同時並行で住居跡よりも古くその西側に分布する小構群の精査を行った。これらの掘り込み、平面図作成、細部の写真撮影が終了したのは16日である。17日以降は、調査区の全景写真撮影、断面図作成を行い、22日には補足調査、23日には調査器材の搬出を行った。24・25日に埋戻しを行い、本調査の一切を終了した。

2 調査成果

（1）層序

今回の調査で確認した層序は以下の通りである。

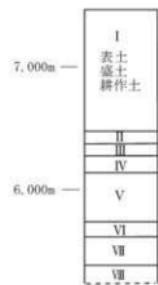
I層：現代の表土・盛土・耕作土層で、厚さは約1mである。

II層：褐灰色土で、厚さは10cm前後である。中世の堆積土。

III層：均質なにぶい黄橙色土で、厚さは5～10cmである。



第1図 調査区位置図



第2図 層序模式図

- IV層：V層起源の粒子を含むにぶい黄褐色土で、厚さは10～15cmである。本調査での遺構検出面。
- V層：均質なにぶい橙色土で、厚さは40cm前後である。以下が本地区周辺での基盤となる土層。
- VI層：やや砂が混じる黄灰色粘質土で、厚さは10cm前後である。
- VII層：黄色粘質土のブロックが混じる黄灰色粘質土で、厚さは20cm前後である。
- VIII層：均質な灰色粘質土で、厚さは20cm以上である。

（2）発見した遺構と遺物

堅穴住居跡、溝跡、土壤を発見した。検出面はすべてIV層上面である。

S I 2102堅穴住居跡（第3図3～6）

【位置】調査区のほぼ中央に位置する。

【重複】SD2101・2105・2106・2109・2110・2111、S I 2103と重複しており、SD2101よりも古く、SD2105・2106・2109・2110・2111、S I 2103よりも新しい。

【平面形・規模・方向】東西3.8m、南北2.2m以上の方形で、方向はほぼ発掘基準線に沿う。

【埋土】3層に分けられ(第6図中央の5～7層対応)、5層が均質で白色粒を含むにぶい黄褐色土、6層がV層粒、小ブロックを含む褐灰色土、7層が掘方理土で、V層小ブロックを含む灰黄褐色土である。

【壁の状況】ほぼ垂直に立ち上がるが、上端でやや開く。残存壁高は約50cmを計る。

【床面の状況】7層上面を床面とし、その上面のカマド前面には、灰・焼土・炭化物粒を含む生活時の堆積層(第3図左の6～8層対応)が見られた。

【カマド】北辺の中央付近に付設され、煙道部のみが検出され燃焼部は壊されていた。煙道部は天井が崩壊しており、残存で長さ1.42m、幅36～47cm、深さ40cmを計る。燃焼部に相当する底面には、直径20～25cm、深さ14cmの小ピットが検出された。その上面は被熱し硬化していた。

【柱穴】住居に伴う柱穴は確認されなかった。

【周溝】周溝は確認されなかった。

【遺物】住居内理土より土師器壺（A・B類）、須恵器壺（I類：第5図4）・瓶・甕、平瓦、スサ入り焼粘土塊が、床面では須恵器壺（III類：第5図2・3）が出土している。また、カマド燃焼部より南西側の床面より非ロクロ調整の土師器甕（A類）が、廃棄された状況で5個体まとめて出土している（第4図・5図1）。この他には、掘方理土より土師器壺・甕（A類）、須恵器瓶（第5図5）・甕の破片がある。

S I 2103堅穴住居跡（第3図3～6）

【位置】調査区の東半に位置する。

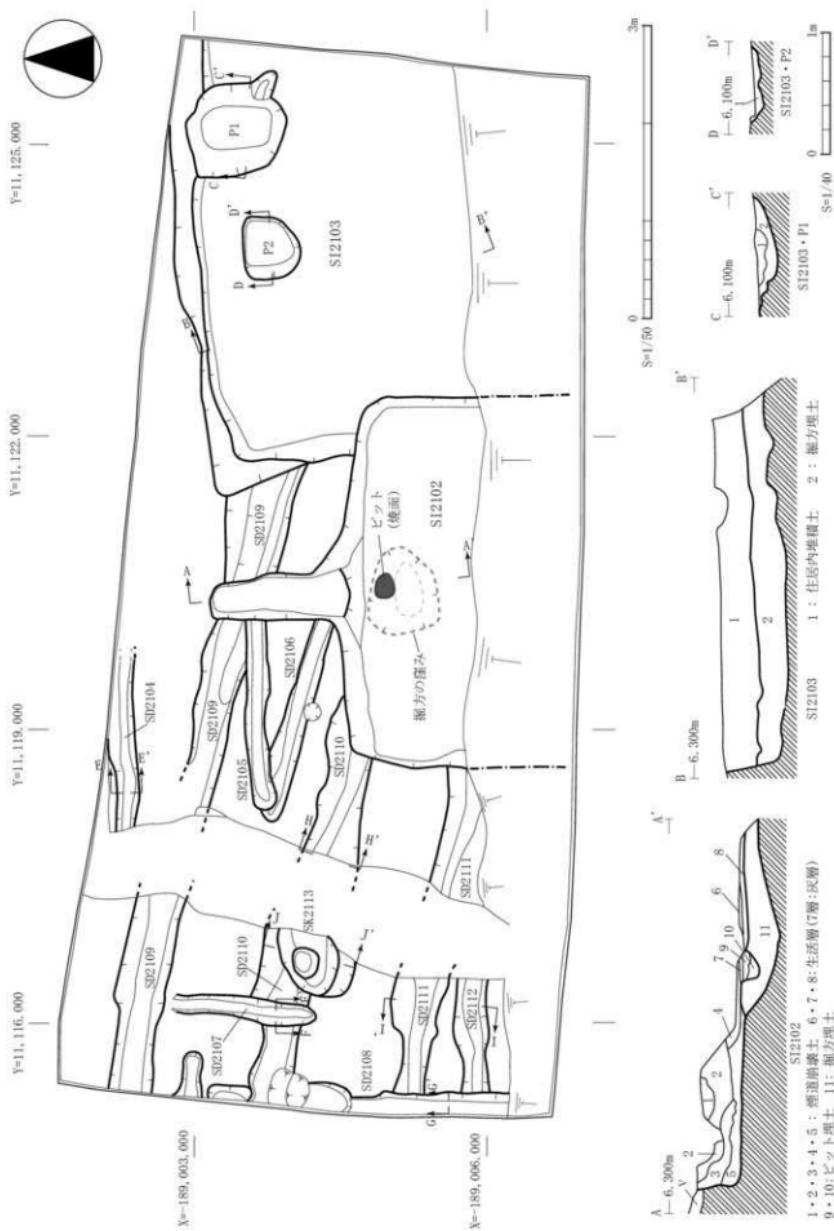
【重複】SD2101・2109、S I 2102と重複しており、SD2101、S I 2102よりも古く、SD2109よりも新しい。

【平面形・規模・方向】東西4.5m以上、南北4m以上の方形で、方向は北辺でみると東で約7度西に偏する。

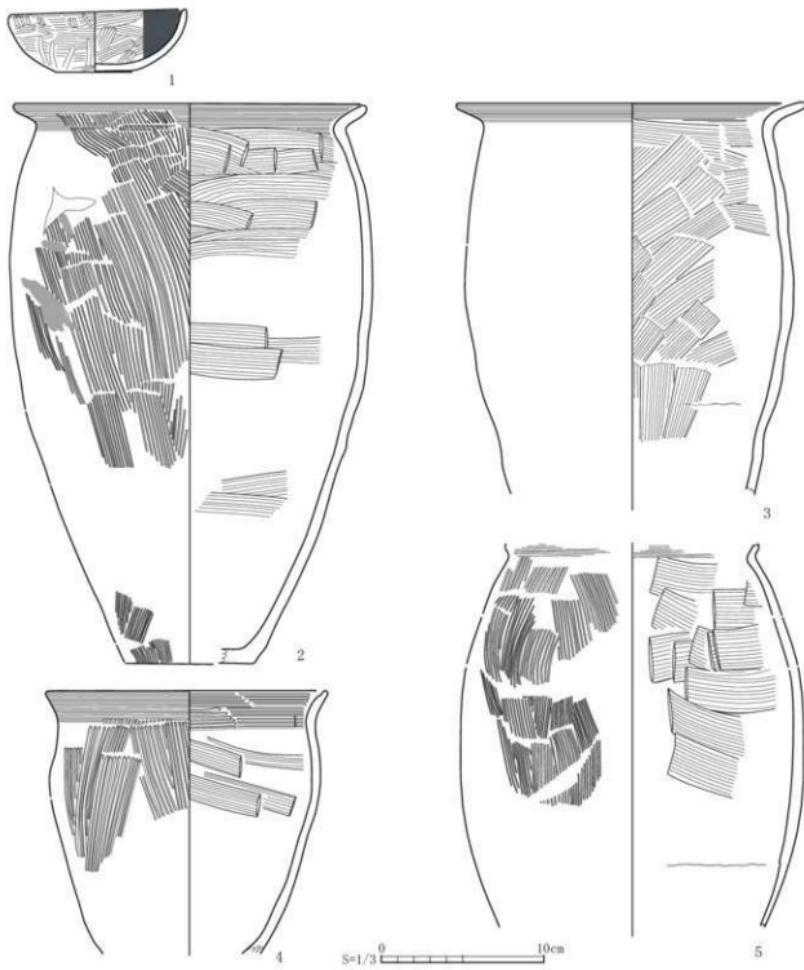
【埋土】調査区東壁でみると4層に分けられる(第6図右の8～11層対応)。8・9層が住居内埋土で、8層が黄橙色粒を含む均質な明黄灰色土、9層がV層ブロックを含む黄褐色土、10層が灰とオリーブ色土が互層になる生活層、11層が掘方理土で、V層ブロックが主体の浅黄色土である。

【壁の状況】やや傾斜しながら立ち上がるが、上端でやや開く。残存壁高は約30cmを計る。

【床面の状況】11層（第6図右）上面を床面とする。



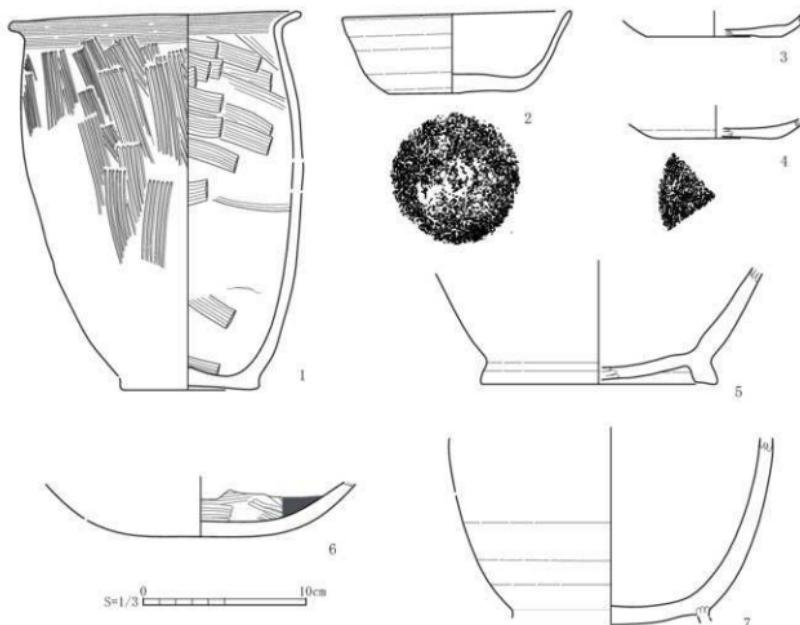
第3図 梱出構平面・断面図(1)



(単位: cm)

| 番号 | 種類 | 層位 | 特徴 | | 口径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録 番号 | 備考 |
|----|-------|----|-----------------|------------|-----------------|----------------|------|----------|----------|----|
| | | | 外面 | 内面 | | | | | | |
| 1 | 土師器・环 | 床面 | ヘラミガキ | ヘラミガキ、黒色処理 | (10.8) 9/24 | 4.8 24/24 | 3.7 | 5-1 | R6 | A類 |
| 2 | 土師器・甕 | 床面 | ヨコナデ→ハケメ、底部：木葉痕 | ヨコナデ→ヘラナデ | (21.3) 23/24 | (7.9) 11/24 | 34.3 | 5-6 | R1 | A類 |
| 3 | 土師器・甕 | 床面 | ヨコナデ | ヨコナデ→ヘラナデ | (21.4) 18/24 | — | — | 5-7 | R2 | A類 |
| 4 | 土師器・甕 | 床面 | ヨコナデ→ハケメ | ヨコナデ、ハケメ | (17.2) 21/24 | — | — | | R3 | A類 |
| 5 | 土師器・甕 | 床面 | ヨコナデ、ハケメ | ヨコナデ、ヘラナデ | — | — | — | | R5 | A類 |

第4図 S I 2102出土土器



(単位: cm)

| 番号 | 種類 | 遺構・層位 | 特徴 | | 口径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録 番号 | 備考 |
|----|-------|-------------------|----------------------|------------|-----------------|----------------|------|----------|----------|------|
| | | | 外面 | 内面 | | | | | | |
| 1 | 土器器・甕 | S.I.2102 床面 | ヨコナデ→ハケメ | ヨコナデ、ヘラナデ | (17.6) 22/24 | 8.4 10/24 | 23.0 | 5-8 | R4 | A類 |
| 2 | 須恵器・坏 | S.I.2102 床面 | クロロナデ 底部: ヘラ切り | クロロナデ | (14.0) 17/24 | 7.9 24/24 | 4.9 | 5-3 | R7 | III類 |
| 3 | 須恵器・坏 | S.I.2102 床面 | クロロナデ 底部: ヘラ切り | クロロナデ | — 8/24 | (8.2) 5/24 | — | | R15 | III類 |
| 4 | 須恵器・坏 | S.I.2102 住居内埋土 | クロロナデ 底部: 回転ヘラケズリ | クロロナデ | — 5/24 | (7.8) 12/24 | — | | R14 | I類 |
| 5 | 須恵器・瓶 | S.I.2102 施方埋土 | クロロナデ | クロロナデ | — — | (14.6) — | — | 5-4 | R11 | |
| 6 | 土器器・甕 | S.I.2103 施方埋土 | 不明 | ヘラミガキ、黒色処理 | — 24/24 | 11.0 — | — | 5-2 | R12 | A類 |
| 7 | 須恵器・瓶 | S.I.2103 住居内埋土 | クロロナデ | クロロナデ | — — | — — | — | 5-5 | R10 | |

第5図 S.I.2102・2103出土土器

【カマド】調査区内でカマドは検出されていない。

【周溝】周溝は確認されなかつた。

【付随する施設】調査区の北東隅、住居北壁に接して付設された不整形の塹みを検出した(P1)。規模は、 $1.4 \times 0.94m$ 、深さ16cmを計る。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられ、1層が炭化物粒、焼土粒を多量に含む褐色灰色土である。2層はにぶい黄橙色土で、1層と同じ含有物を含むがまばらである。

また、これの南西側に隣接して不整形の窪みを検出した（P 2）。規模は、 0.64×0.6 m、深さ14cmである。

断面形は逆台形で、底面は凹凸がある。埋土は炭化物粒、焼土粒を多量に含む褐色土の単層である。

【柱穴】住居に伴う柱穴は確認されなかった。

【遺物】住居内埋土から土師器壺・甕（A類）、須恵器瓶（第5図7）、スサ入り焼粘土塊、掘方埋土から土師器壺（A類：第5図6）の破片が出土している。

S D2099溝跡（第6図）

【位置】調査区西半部に位置する南北溝跡である。

【重複】S D2101・2100と重複しており、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約7度東に偏する。確認できた長さは4.9m以上、上幅0.62～1.1m、下幅0.3～0.6m、深さ0.3mである。北半ではやや蛇行する。

【埋土】2層に分けられ、1層が均質な浅黄色土、2層はV層が黄灰色土と互層になる。

【壁・底面】底面はやや凹凸があり、壁は内湾気味に垂直に近く立ち上がる。底面の比高はない。

【遺物】土師器壺（A類）・甕（B類）、須恵器瓶の破片が出土している。

S D2100溝跡（第6図）

【位置】調査区北端に位置する東西溝跡である。

【重複】S D2099と重複しており、それよりも古い。

【方向・規模】方向は東で約1度北に偏する。確認できた長さは7.8m以上、上幅0.5～0.6m、下幅0.2～0.4m、深さ0.2mである。

【埋土】灰色火山灰粒および小ブロック含む浅黄橙色土の単層である。

【壁・底面】断面形は船底形を呈する。

【遺物】須恵器壺の破片が出土している。

S D2101A・B溝跡（第6・7図）

【位置】調査区南端に位置する東西溝跡である。

【重複・変遷】S D2099と重複しており、それよりも古い。およそ同位置で2時期の変遷を確認した（A→B期）。

【方向・規模】方向はB期で測ると東で約2度北に偏しており、長さは10.7m以上である。

A期

南半の上部がB期に壊されており、残存状況は悪い。

【規模】上幅1.2m以上、下幅0.5m、深さ0.7mである。

【壁・底面】底面はほぼ平坦で、断面は逆台形を呈する。

【埋土】調査区東壁では3層に分層されたが、大別2層である。1層が均質な灰黄色土、2層が上面にV層ブロックを多く含む黄灰色土、3層がV層ブロックを全体に含む黄灰色砂質土である。

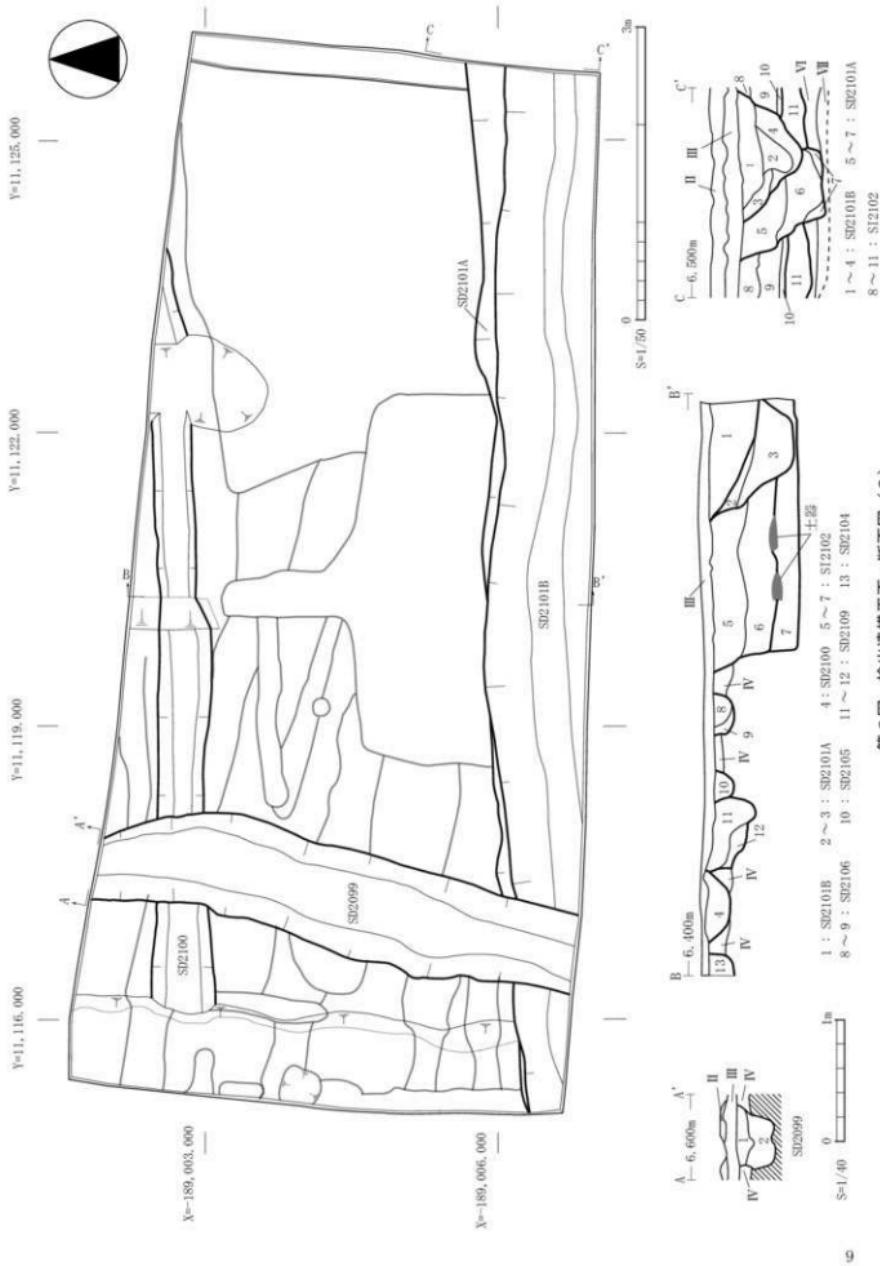
【遺物】土師器壺（A・B類）・甕（B類）、須恵器壺（II・III類）・瓶の破片が出土している。

B期

【規模】上幅1.1m前後、下幅0.2～0.4m、深さ0.3～0.5mである。

【壁・底面】底面は丸底ぎみで、壁は内湾しながら開く。

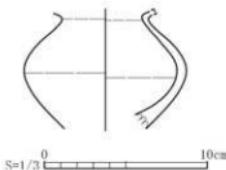
【埋土】調査区東壁では4層に分層されたが、大別すると2層（1・2層、3・4層）である。また、



第6図 検出透構平面・断面図（2）

調査区中央付近では単層（1・2層対応）であった。1層・2層が灰白色火山灰のブロックを多量に含むにぶい黄橙色土、3・4層は均質な灰黄・褐灰色土である。

【遺物】土師器壺・甕（B類）、須恵器瓶（第7図）・甕の破片が出土している。



第7図 S D 2101 B溝跡出土土器

小溝跡（第3図）

堅穴住居跡より古い小規模な溝跡については、方向、規模、埋土等の類似性や位置関係から以下の3群に分けて記載する。

第1小溝跡群（S D2109・2110・2111・2106・2112）

【位置】調査区の中央から西側全体に位置する東西溝跡である。

【重複】第1・2小溝跡群、S I 2102・2103と重複しており、それよりも古い。

【規模・方向】5条検出しているが、幅や深さなどから、さらにS D2109・2110・2111（1a）とS D2106・2112（1b）に分かれる可能性がある。確認できた長さは、最も長い1aのS D2109で、6.7m以上、幅30～70cm、深さ20～30cmである。1bは幅20～37cm、深さ15～20cmと1aに比べ小規模である。方向は東で8～10度南に偏する。

【埋土】埋土は単層ものと2層に分けられるものとがある。2層に分けられるものは、1層が均質な灰黄褐色土、2層がV層ブロックを含む黄褐色～黄橙色土である。単層はV層小ブロックを含む褐灰色土である。

【壁・底面】底面はS D2109でみると、一段落ちる崖みがあり、平坦面を形成しながら内湾気味に立ち上がる。その他は、底面が丸みを持ち、壁は内湾しながら立ち上がる。

【遺物】S D2109埋土より土師器甕の破片が出土している。

第2小溝跡群（S D2104・2105）

【位置】調査区の中央の北側に位置する東西溝跡である。

【重複】第1小溝跡群、S I 2102と重複しており、S I 2102よりも古く第1小溝跡群よりも新しい。

【規模・方向】2条検出している。確認できた長さは、1.95m以上、幅20～25cm、深さ8～15cmである。方向は東で約4度東に偏する。

【埋土】均質なにぶい黄橙色土の単層である。

【壁・底面】断面はU字形を呈する。

【遺物】S D2104埋土より土師器壺（A類）・甕（B類）の破片が出土している。

第3小溝跡群（S D2107・2108）

【位置】調査区の西端に位置する南北溝跡である。

【重複】第1小溝跡群と重複しており、それよりも新しい。

【規模・方向】2条検出している。確認できた長さは、SD2108で2.08m以上、幅18~25cm、深さ15cm前後である。方向は北で2~7度東に偏する。

【埋土】均質な灰褐色土の単層である。

【壁・底面】底面はほぼ平坦で、壁は内湾しながら急角度で立ち上がる。

【遺物】遺物は出土していない。

SK2113土壤 (第3図)

【位置】調査区西端ほぼ中央に位置する。

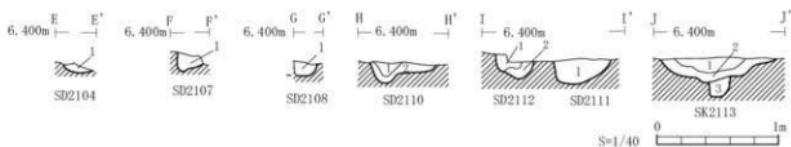
【重複】SD2099、第1小溝跡群と重複しており、SD2099よりも古く第1小溝跡群よりも新しい。

【平面形・規模・方向】東側はSD2099に壊されており全体の形状は不明である。不整形を呈し底面にはピット状の窪みが検出された。南北方向で約1m、東西方向で0.62m以上、深さは26cmである。ピット状の窪みは直径20cm、深さ10cmである。

【埋土】3層に分けられ、1層が灰白色火山灰を含むにぶい黄橙色土、2層が炭化物粒を多量に含むにぶい黄褐色土、3層が炭化物粒を少量含む褐色土である。

【壁・底面】底面はほぼ平坦で、壁はだらかに立ち上がる。

【遺物】遺物は出土していない。



第8図 小溝群ほか断面図

堆積層出土の遺物

II層からは、土師器壺・甕（B類）、須恵器壺（I類）・甕、III層からは、土師器壺（A・B類）、須恵器壺・甕の破片が出土している。

3まとめ

ここでは、遺構の重複関係において新しい方から、主にその年代について検討する。

はじめに、SD2100・2101B溝跡、SK2113については、遺物の出土量が僅少であるので詳細な検討は難しいが、埋土に灰白色火山灰を含むことから、10世紀前葉を中心とした時期に機能していたとみられる。また、これより古いSD2101A溝跡は9世紀代と推定される。SD2099溝跡は、SD2100・2101溝跡よりも新しいことから10世紀前葉以降で、下限は14世紀後半に堆積したと考えられているII層におおわれていることからそれ以前である。

SD2101A・B溝跡は、東西という方向性を意図して構築されたものとみられる。埋土に灰白色火山灰を含む同時期の溝は、本調査区の東方約100mに位置する第16次調査区でも発見されている。この溝跡は

真北方位をとり、本溝跡とは直交することから、方形を意識した区画を想定することができる。本地区は多賀城南面一帯に施工された方格地割りの外であり、このような方位に規制された溝の性格について考察するのは難しいが、たとえば、小溝群との関係を考慮した場合では、耕作域の地境を示すものなどが考えられる。

次に、堅穴住居跡の年代について検討する。S I 2102の床面より非ロクロ調整の土師器坏・甕A類と須恵器坏III類が出土している。土師器坏は口縁部が内湾気味に開き底部は平底である。甕は大型と中型があり、いずれも長胴形をなし口縁部が短く外反する。須恵器坏は底部がヘラ切りもので、第5図2は底径／口径比が0.56、器高／口径比が0.35である。住居内埋土のものは、土師器坏A類に口縁が短く内湾しながら立ち上がる有段丸底坏の破片とロクロ調整のB類の破片がそれぞれ1点確認された。須恵器坏（第5図4）には、底部が回転ヘラケゼリのI類がある。以上のような特徴、構成をもつ土器群は、山王遺跡S D 2124溝跡（宮城県教委1994）、S D677溝跡（宮城県教委1997）、市川橋遺跡S X1351A河川跡（多賀城市教委2003）、高崎遺跡 S I 05堅穴住居跡（多賀城市教委1987）出土土器群の内容と類似しており、村田晃一氏の土器編年（村田2007）に対比すれば7段階に位置づけられ、8世紀中頃～後半の時期にあたる。S I 2103出土土器については、出土量が少ないため詳細な検討はできないが、土師器坏・甕A類の特徴がS I 2102と類似するので、奈良時代の範疇に収まるものとみておきたい。

以上のことから、本堅穴住居跡の年代については、8世紀中頃～後半と考えられた。新田遺跡後地区においては、第1次調査で同時期の住居跡が4棟発見されており、そのうち1棟からは銀環が出土している。新田遺跡北部の自然堤防上では散発的ではあるが、奈良時代の堅穴住居跡が分布しており、多賀城南面一帯に居住した人々との関係（階層差など）が今後の課題となる。

小溝群はいずれも堅穴住居跡よりも古いことから、奈良時代もしくはそれ以前の時期と推定される。上限年代については、出土遺物も少なく詳細は不明であるが、検出層位などから判断して古墳時代前期までは遡らないと思われる。

引用・参考文献

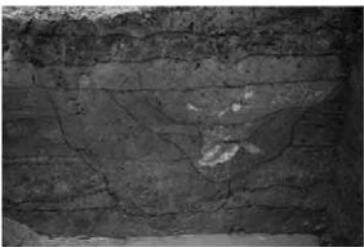
- 吾妻俊典「多賀城とその周辺におけるロクロ土師器の普及開始年代」『宮城考古学』第6号 宮城県考古学会 2004
多賀城市教育委員会『高崎遺跡－第12次調査報告書－』 多賀城市文化財調査報告書第12集 1987
多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II－』 多賀城市文化財調査報告書第70集 2003
宮城県教育委員会「山王遺跡八幡地区の調査－県道泉塩釜線閑連調査報告書I－」宮城県文化財調査報告書第162集 1994
宮城県教育委員会「山王遺跡V－第一分冊〈八幡地区〉－」「山王遺跡V－第二分冊〈伏石地区・考察〉－」宮城県文化財調査報告書第174集 宮城県教育委員会 1997
宮城県教育委員会「山王遺跡町地区の調査－県道泉塩釜線閑連調査報告書II－」宮城県文化財調査報告書第175集 1998
村田晃一「東北・北海道における6～8世紀の土器変遷と地域の相互関係－宮城県中部から南部－」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部 2007



S D 2100 - 2101溝跡検出状況（西より）



S D 2099溝跡断面図（南より）



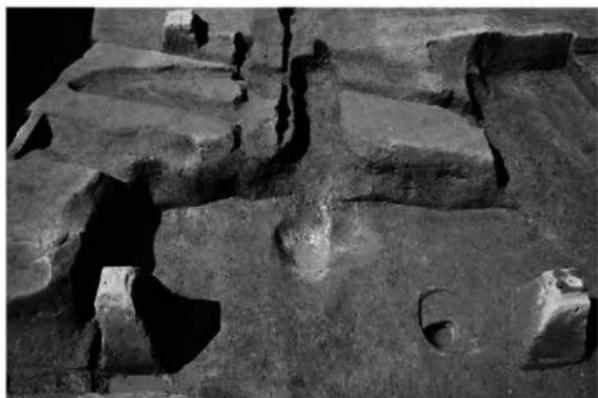
S D 2101溝跡断面図（西より）



S D 2099 - 2100 - 2101B溝跡完掘状況（南西より）



S I 2102 壁穴住居跡床面状況
(南より)



S I 2102 壁穴住居跡完振状況
(南より)



S I 2102 壁穴住居跡煙道半裁状況
(南より)





S I 2102・2103竪穴住居跡
(南より)



S I 2103竪穴住居跡土層断面
(西より)



調査区全景（小溝群・竪穴住居跡）
(西より)



1 土師器壊 (第4図1)



2 土師器壊 (第5図6)



3 須恵器壊 (第5図2)



4 須恵器瓶 (第5図5)



5 須恵器瓶 (第5図7)



6 土師器壺 (第4図2)



7 土師器壺 (第4図3)



8 土師器壺 (第5図1)

1・3・4・6・7・8 : S I 2101

2・5 : S I 2103

III 新田遺跡第105次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、新田字後地内における福祉施設新築に伴うものである。平成27年7月、地権者より当該区における福祉施設（デイサービス）新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、全ての工事が盛土内で施行されるものであったが、対象面積が約900m²と広範囲に及んでいることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺跡の内容を把握するための確認調査を実施することで協議を重ね、9月25日に地権者から発掘調査に関する依頼・承諾の提出を受けたものである。

調査は、9月29日より、重機を用いて対象区のおよそ中央部を掘削し調査区を設けた。30日より作業員を動員し調査区の精査を行った結果、現表土下約30～40cmの灰黄褐色粘質土（IV層）上面で、SD2115～2116溝跡を確認した。このうち、SD2115については、埋土の状況から数時期の変遷があると予想できたため、調査区東壁及び中央部で一部掘り下げを行い、3時期の変遷があると判断した。10月6日、調査区全景の写真撮影及び平面・断面図の作成を開始した。7日には実測基準点の移動を行うとともに、調査器材を撤収した。10月13日、重機により調査区の埋め戻しを行い、本調査の一切を終了した。

2 調査成果

（1）層序（第2図）

今回の調査では、現在の表土以下4層の堆積を確認した。

I層：黒褐色粘質土主体の旧耕作土で、厚さは30～40cmである。

II層：灰黄褐色粘質土が主体であり、厚さ10～15cmである。

III層：にぶい黄褐色粘質土が主体であり、厚さは5～10cmである。

IV層：にぶい黄褐色粘質土が混入する灰黄褐色粘質土であり、厚さは30cm以上である。SD2115～2117等の遺構検出面である。

（2）発見遺構と遺物

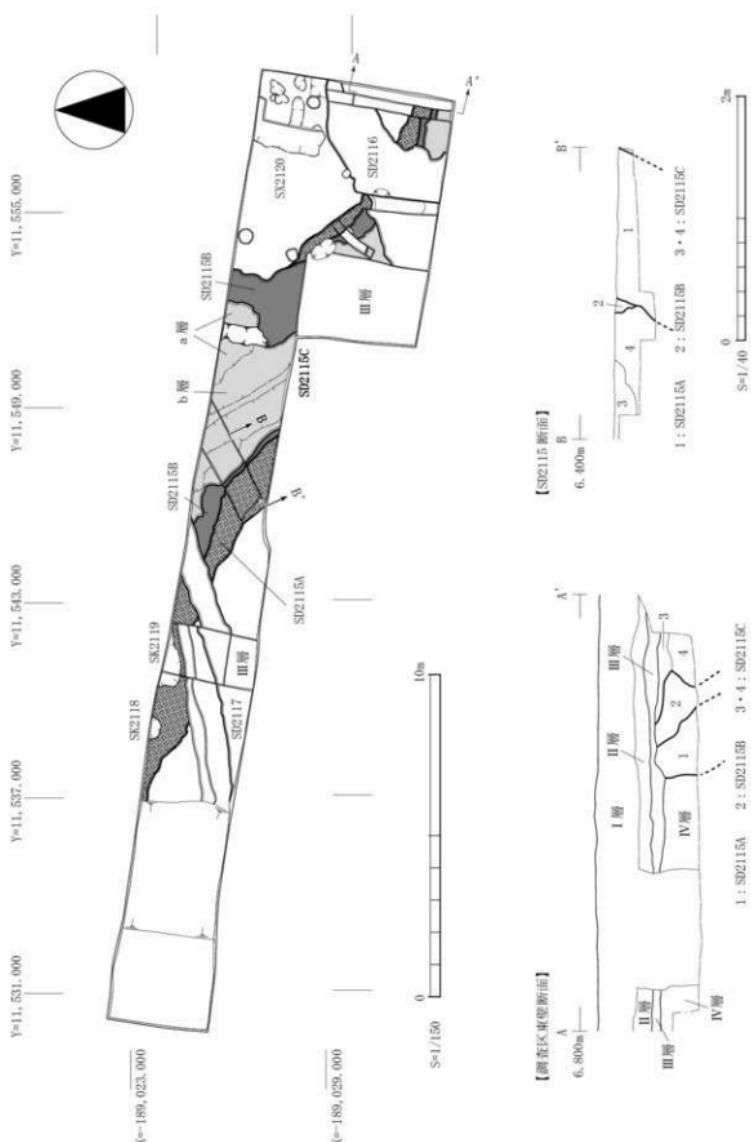
今回の調査では、IV層上面で溝跡や土壤を発見した。

SD2115溝跡（第2図）

【位置・形態】調査区全域で確認した溝跡である。およそ東西方向の溝と考えられる。埋土及び壁の立ち上がりの状況から、3時期の変遷（A→C期）があると判断した。



第1図 調査区位置図



【重複】SD2116・2117、SK2118・2119と重複し、それらよりも古い。

【方向・規模】方向は、A期南壁上端部で測ると、西で約22度北に偏している。規模は長さ23m以上、上幅はA期が約6m、B期が約5m、C期が2.5～5mと推測される。

【壁】3時期ともに急角度で立ち上がっている。このうち、C期では南・北壁とともに、B期側に抉れている。

【埋土】A期は砂や炭化物粒が多く混入する暗褐色粘質土、B期は粗砂が多く混入する褐色粘質土である。C期では2層確認することができ、下層は暗褐色粘質土小ブロックが多く混入するにぶい黄褐色砂質土、上層は黒褐色粘質土である。また、C期上面で確認した灰黄褐色粘質土が多量に混入する黒褐色粘質土（a層）及び褐色粘質土（b層）についても、一連の埋土と判断した。

【遺物】出土していない。

SD2117溝跡（第2図）

【位置・形態】調査区西半部で確認した、東西方向の溝跡である。

【重複】SD2115と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は、東で約14度北に偏している。規模は長さ7m以上、上幅は約1mである。

【埋土】褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。

SD2116溝跡（第2図）

【位置・形態】調査区東半部で確認した溝跡であり、北側に向かうほど溝の幅が収束する様相を呈している。

【重複】SD2115と重複し、それよりも新しい。

【規模】長さ7m以上、上幅は南壁付近で約4mである。

【埋土】炭化物が多量に混入する灰黄褐色粘質土である。

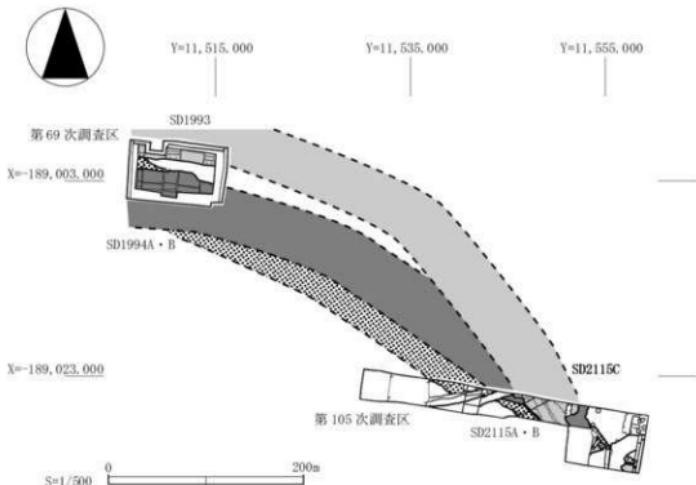
【遺物】出土していない。

3まとめ

今回は遺構の確認調査であり、原則発見した遺構埋土の掘り下げは行っていない。このため、古代の土器片及び無軸陶器の小片が堆積層から少量出土しているのみであり、本調査の成果から遺構の年代を決定することはできない。

一方、本地区西側近接地で実施した第69次調査で、14世紀後半頃に堆積したとされている暗黃色土（IV層）及びにぶい黄褐色土（III層）に覆われる、東西方向のSD1993・1994A・B溝跡を発見している。調査区の制限上、これらの全容は明らかではないが、上幅はSD1993が1.6m以上、SD1994Bが2.5m以上と大規模なものであり、ともに調査区外に延びている。それら遺構の年代については、III・IV層との関係及び出土した無軸陶器の年代観より、12～14世紀頃のものと推測している。

今回発見したSD2115A～Cは、SD1993・1994A・Bのおよそ延長線上に位置していることや、ともに3時期の変遷と捉えることが可能であるなど、平面観察上は共通した要素が認められる（第3図）。遺構の確認にとどめたため、断面の形状や深さ等、詳細な比較は困難であるが、ここでは一連の溝跡である可能性を指摘しておきたい。



第3図 第69・105次調査区合成図



| (単位: cm) | | | | | | | | | | |
|----------|--------|----------|----|----|-----------|-----------|----|----------|----------|----|
| 番号 | 種類 | 造形 部位 | 特徴 | | 口径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 回数 | 登録 番号 | 備考 |
| | | | 外面 | 内面 | | | | | | |
| 1 | 無軸陶器 壺 | I部 | ナデ | ナデ | - | - | - | - | R2 | |

第4図 出土遺物

参考文献

多賀城市教育委員会『新田遺跡—第4・11次調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第23集

多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡2—平成23年度発掘調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第108集



調査区全景（西より）



調査区東壁土層断面（S D 2115）

IV 新田遺跡第106次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、新田字北地内における宅地造成工事に伴う確認調査である。平成27年6月に、地権者より新田遺跡の北部に位置する当該地での宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、水田に最大1.5mの厚さの盛り土を行い、計画道路には給排水施設を埋設し、その際に造成面より深さ0.70～2.22mの掘削を行うこと、また、区画外周部東側・南側において土留め用L字型擁壁を設置するため、造成面より深さ1.8mの掘削を行うことから、遺跡への影響が懸念された。このため、遺跡保存の協議を行い、記録保存のための確認調査を実施するに至った。10月16日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、11月4日より現地調査を開始した。

はじめに、計画道路部分にあたる第1区北側より、重機による水田耕作土の除去を行い、現表土以下40cmで黒色粘質土（Ⅲ層）上面で遺構を確認した。6日より作業員を動員し、遺構の平面精査を行った。その結果、SD2128、SD2129、SD2130、SD2132の大小4条の溝跡と、SX2121、SX2131の2本の河川跡を確認した。いずれも調査区外へと延びており、その全容はつかめなかつた。また、調査区の南側に設定した第2区では、遺構の発見はできなかつた。これらの図面作成、写真撮影が終了したのは11月20日である。引き続き本発掘調査に調査に移行するため、埋め戻しは行わず11月23日をもって本調査的一切を終了した。

2. 調査成果

（1）層序

今回の調査では、現在の表土以下4層の堆積を確認した。

I-1層：現在の表土・水田耕作土で、厚さは20cmである。

I-2層：褐色粘質土の旧水田耕作土で、厚さは10cmである。

II 層：にぶい黄色砂質土が主体であり、厚さは10～20cmである。調査区の南側で厚く堆積する。

III 層：黒色粘質土が主体であり、厚さは10cmである。

（2）発見遺構

今回の調査では第1区のⅢ層上面で溝跡と河川跡を発見した。

SD2129（第2図）

【位置・形態】調査区の南側で確認した東西方向の溝跡である。

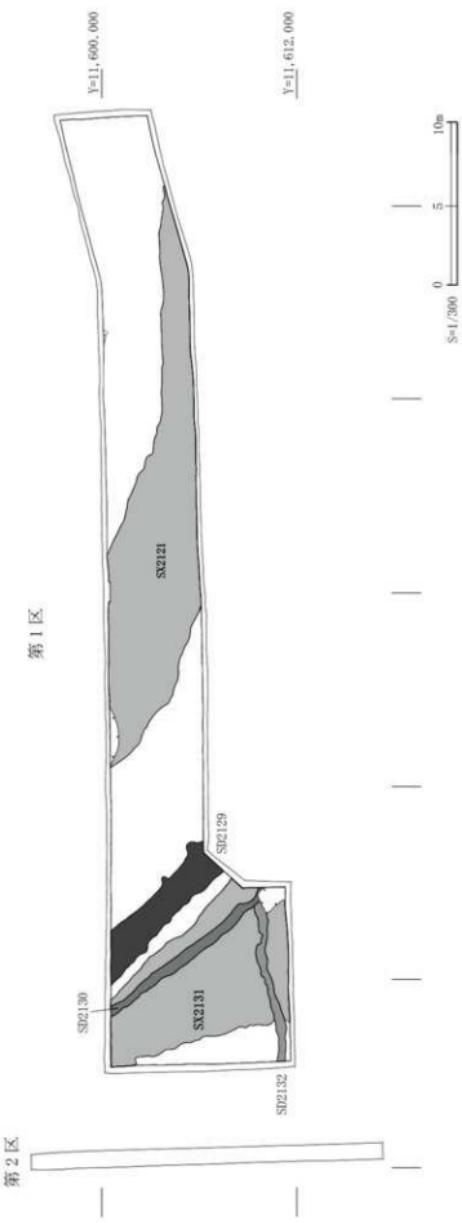
【重複】重複はない。

【方向・規模】方向は東で約45度北に偏している。規模は10m以上、上幅は約2mである。



第1図 調査区位置図

第2図 道構平面図



【埋土】灰色粘質土である。溝の中央部上面に、灰黄色粘質土が堆積する。

【遺物】出土していない。

S D2130 (第2図)

【位置・形態】調査区の南側で確認した溝跡である。

【重複】SD2131、SD2132と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は東で約38度北に偏している。規模は12m以上、上幅は約60cmである。

【埋土】黒褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。

S D2132 (第2図)

【位置・形態】調査区の南側で確認した河川跡と推定される東西方向の溝跡である。

【重複】SD2130、SD2131と重複し、SD2130よりも古く、SD2131よりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約10度東に偏し、全体が緩やかに蛇行する。規模は10m以上、上幅は40～70cmの不整形である。

【埋土】黒褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。

S X2121 (第2図)

【位置・形態】調査区を南北に縦断する河川跡である。

【重複】重複はない。

【方向・規模】調査区北側ではほぼ南北方向だが、調査区中央部から西に向かって緩やかに湾曲する。

規模は長さ24m以上、上幅は約6mである。

【遺物】出土していない。

S X2131 (第2図)

【位置・形態】調査区の南側で確認した東西方向の河川跡である。

【重複】SD2130、SD2132と重複し、それよりもよりも古い。

【方向・規模】方向は東で約33度北に偏している。規模は15m以上、上幅は4m～8mである。

【埋土】にぶい橙色砂質土である。

【遺物】出土していない。

3.まとめ

本調査では、遺構の掘り下げを行っていないため、各遺構の年代等の詳細は把握していない。しかし、新田遺跡の周辺調査で確認される14世紀後半の黒色粘土層（Ⅲ層）を、調査区のほぼ全域で検出している。今回発見した遺構も、このⅢ層上面で検出していることから、いずれも14世紀後半以降のものと推定される。また、調査区1を縦断するSX2121河川跡については、埋土が水田耕作土に近似することから、近世以降の比較的新しいものと考えられる。

参考文献

多賀城市教育委員会「新田遺跡第77次調査」多賀城市文化財調査報告書第108集 2011



第1区全景（北より）



第1区全景（南より）

写真図版 1



S D 2129 遺跡（南西より）



第1区南部全景（北より）



S X 2121 河川跡（南西より）



第2区全景（西より）



調査区東壁土層断面（西より）

写真図版4

V 山王遺跡第151次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字八幡地内における個人住宅及び共同住宅建築工事に伴う本発掘調査である。平成27年5月に、地権者より山王遺跡の北東部に位置する当該地における個人住宅・共同住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅部の基礎工事として直径600mm、長さ9mの柱状改良杭を84本打ち込むことから、遺跡への影響が懸念された。このため、遺跡保存のための協議を行ったが、当該地の地盤の強度などから判断して、現計画での工事実施が望ましいとの結論に達し、記録保存のための本発掘調査を実施するに至った。なお、計画建物は一続きの建物に個人住宅部と共同住宅部が併存するつくりであることから、前者の範囲は国庫補助事業、後者の範囲は受託事業で調査を実施することとした。これらについて、地権者の同意が得られたことから、8月17日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、8月27日より現地調査を開始した。

はじめに、重機により現代の盛土及び旧水田耕作土の除去を行い、掘削した土砂を場外に搬出する作業を行ったが、連日の悪天候のためこれを終了したのは9月3日であった。4日から作業員を動員し、調査区内に壁面での土層観察を兼ねた排水溝を巡らせるとともに、平面精査を開始した。しかし、その後も台風の影響などにより作業中止の日が続き、本格的に遺構検出作業が実施できたのは20日過ぎであった。28日からは、調査区西端部で検出した南北方向の溝跡（SD1889溝跡）の掘り下げを開始した。この溝跡は、周辺での調査成果から、多賀城南面における方格地割を構成する道路網のうち、西6南北道路の東側溝にあたると判断した。さらに、調査区壁面の土層観察から、3時期の変遷があることを確認した。これと併行して、下層における古墳時代の遺構の有無を確認するために、調査区北壁際に設けた排水溝の一部を拡幅、深掘りした。また、遺構検出作業により調査区のほぼ全域で掘立柱建物跡、溝跡、土壙などを検出したことから、10月6日からはこのうち調査区西側で検出したSB1890建物跡の掘り下げを開始した。掘立柱建物跡については、この後調査区東側で検出したSB1891建物跡とSB1892建物跡の掘り下げを順に行い、15日までに写真撮影、図面作成までの一連の作業を終了した。このほかの遺構については、SD1889溝跡の調査を8日に終了し、引き続きこれに切られるSE1894井戸跡の掘り下げを行い、さらに調査区中



第1図 調査区位置図

央付近で検出した土壌などを調査した。この結果、一部の土壤状及び溝状の平面形をもった遺構が、配置や断面の状況から掘立柱建物として組み合うことが分かったため、新たにSB1893建物跡とした。調査は、16日に調査区の全景写真を撮影し、柱穴などの掘り下げや図面の補足作業を経て21日に終了した。その後、26・27日に重機による調査区の埋め戻し作業を行い、本調査の一切を終了した。

2 調査成果

本調査の対象は、計画建物の個人住宅部にあたる範囲で、調査区全体でみると東半部がこれにあたる。一方、調査区西半部は共同住宅部にあたり、山王遺跡第152次調査として調査を実施した。

(1) 層序

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。

I層：現代の盛土層で、厚さは90～100cmである。

II層：現代の水田耕作土で、厚さは15～20cmである。

III層：やや砂質の黄灰色土で、厚さは10cm前後である。上面は、古代の遺構検出面である。

IV層：やや粘性のある黄褐色土で、厚さは10cm前後である。

V層：黄灰色土で、厚さは約10cmである。黄褐色土を混入している。

VI層：黄灰色土で、厚さは10～15cmである。黄灰色土や浅黄色土を混入している。

VII層：黄灰色土で、厚さは5cm前後と薄い。黒褐色土を斑状及び小ブロック状に含んでいる。

VIII層：黄灰色土で、厚さは20cm前後である。上層に比べ灰色が濃い。古墳時代前期の遺物を含んでいる。

IX層：黄灰色砂質土で、厚さは約20cmである。黄褐色土を斑状及び小ブロック状に若干含んでいる。

X層：灰色砂で、厚さは3～5cmと薄い。非常に薄い黑色土と互層に堆積している。

XI層：灰色砂で、厚さは10～15cmである。

XII層：暗オリーブ灰色砂で、厚さは15cm以上である。上層より砂の粒子が粗い。

(2) 発見遺構と遺物

本調査区内で発見した遺構は、掘立柱建物跡2棟と柱穴多数である。なお、調査区中央付近で発見した掘立柱建物跡（SB1893建物跡）は、本調査区と第152次調査区の両方にまたがるものであるが、後者の調査報告書（多賀城市文化財調査報告書第128集）において記述する。

SB1891掘立柱建物跡（第2・3図）

【位置】調査区北東部で発見した。

【桁行・梁行】桁行3間以上、梁行2間以上の東西棟と考えられる建物跡である。

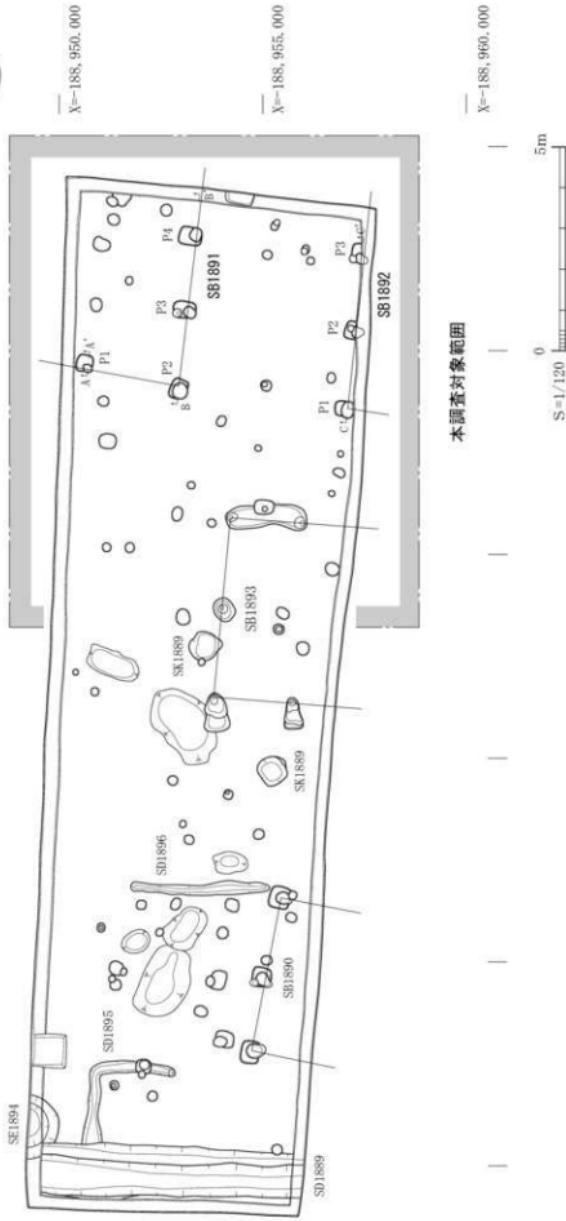
【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は4基（P1～4）検出しており、そのすべてで抜取り穴を確認した。

【重複】P3が小柱穴と重複しており、それより古い。

【方向・規模】方向は南側柱列で測ると、東で約7度南に偏している。建物の規模は、桁行が南側柱列で3.75m以上、柱間は西から1.95m、1.80mである。梁行西妻の柱間は南から1間目が2.35mである。

【掘方】平面形は方形を基調とし、規模は長辺がP1を除くと52～57cm、短辺が42～44cmで、深さは18～26cmである。埋土は黒色土または灰オリーブ色土が主体であり、灰色土等を斑状及び小ブロック状に若干含んでいる。

Y=13,105,000
Y=13,110,000
Y=13,115,000
Y=13,120,000
Y=13,125,000
Y=13,130,000
Y=13,135,000



第2図 調査区平面図

【柱抜取り穴】いずれも柱穴の南側を壊しており、ほとんどが柱のあたり痕跡をとどめている。埋土はいずれも黒色土で、灰オリーブ色土を混入している。

【遺物】各柱穴から、土師器壺・甕（B類）、須恵器壺・甕が出土しているが、いずれも破片である。

S B1892掘立柱建物跡（第2・3図）

【位置】調査区南東部で発見した。

【桁行・梁行】北側柱列のみの確認のため詳細は不明であるが、S B1891建物跡との共通点から、同様の東西棟とも考えられる。その場合、桁行は3間以上と推定される。

【柱痕跡・抜取り穴の有無】柱穴は3基（P 1～3）検出しており、そのすべてで抜取り穴を確認した。

【重複】P 2・3が小柱穴と重複しており、それより古い。

【方向・規模】方向は北側柱列で測ると、東で約6度南に偏している。建物の規模は、桁行が北側柱列で3.65m以上、柱間は西から1.85m、1.80mである。

【掘方】平面形は方形を基調とし、規模は残存しているものをみると一辺が38～45cmに収まる。深さは24～32cmである。埋土は黒褐色土が主体であり、黄褐色土を斑状及び小ブロック状に含んでいる。

【柱抜取り穴】いずれも柱穴の南側を壊しており、また柱のあたり痕跡をとどめている。埋土はいずれも黒褐色土で、黄褐色土を斑状及び小ブロック状に若干含んでいる。

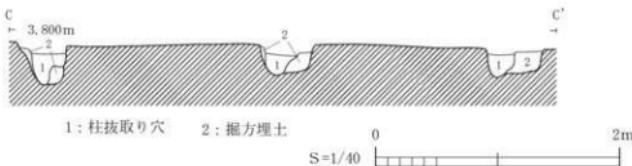
【遺物】各柱穴から、土師器甕（B類）、須恵器壺・甕が出土しているが、いずれも破片である。

S B1891



1: 柱抜取り穴 2・3: 掘方埋土

S B1892



第3図 S B1891・S B1892断面図

3まとめ

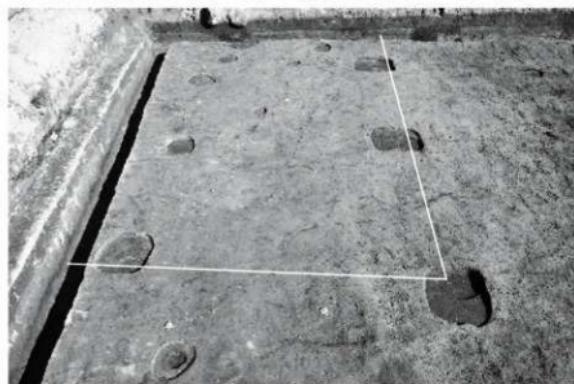
- (1) 本調査区内では、掘立柱建物跡2棟と柱穴多数を発見した。
- (2) 発見した掘立柱建物跡（S B1891建物跡とS B1892建物跡）は、西辺を捕え、方向もほぼ同じである。また、掘方の平面形と規模、すべての柱穴で柱の抜取り穴が確認できることなど共通点が多い。
- (3) 2棟の掘立柱建物跡とも、大部分が調査区外にかかるため、全体の規模等の詳細は不明である。年代については、非ロクロ調整の土師器と須恵系土器が出土していないことから、およそ9世紀代のものとみられる。



調査区全景
(東より)

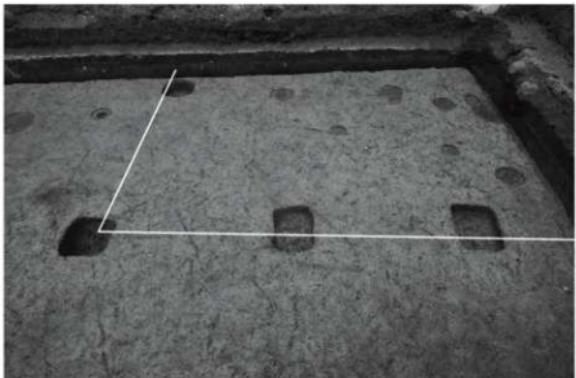


調査区東半部
(北より)



SB1891検出状況
(西より)

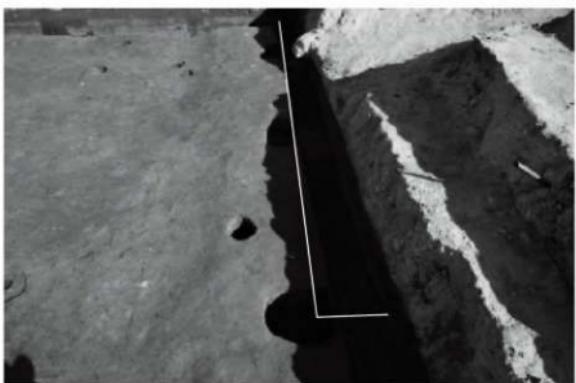
写真図版 1



SB 1891掘り下げ状況
(南より)



SB 1892検出状況
(北より)



SB 1892掘り下げ状況
(西より)

VI 山王遺跡第153次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字山王四区地内における共同住宅の建設に伴うものである。平成27年6月30日に地権者より当該地区における住宅建築と埋蔵文化財とのかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、住宅部の基礎工事として深さ22～42cmの掘削、給排水管の布設で30～82cmの掘削、土留工事で1.75m、ブロック設置で27cm、駐輪場と物置設置工事でも、それぞれ72cmと22cmの掘削を行うものであった。当該区周辺では、現地表下80～90cmが遺構検出面となっている。このことから、ほとんどの工事は盛土内に収まるものであったが、開発対象面積が887m²と広範囲に及ぶことから、確認調査を実施することとなった。その後、9月18日に地権者より、発掘調査の依頼・承諾書の提出を受けて、9月28日から現地調査の実施に至ったものである。

はじめに重機を使用して現代の盛土と水田

耕作土を除去した。翌日から作業員を動員し、III層上面で遺構検出を行い、調査区全域にほぼ同一間隔、同じ方向に延びる小溝跡5条と、同規模ではあるが方向の異なる溝跡1条を発見した。10月1日、これらの遺構の検出状況の写真撮影後、遺構の埋土を掘り下げ、掘り上げ状況の写真撮影も行った。6～8日にかけて任意の基準点を設定し、平面・土層断面図の作成を行った。14日に埋め戻し作業を行い、19日には任意の基準点に国土座標を与え、全ての調査を終了した。

2 調査成果

(1) 層序 (第2図)

今回の調査では、現表土(盛土)も含め4層の堆積を確認した。

I層 調査区全域に堆積する現代の盛土で、厚さは0.9～1mである。

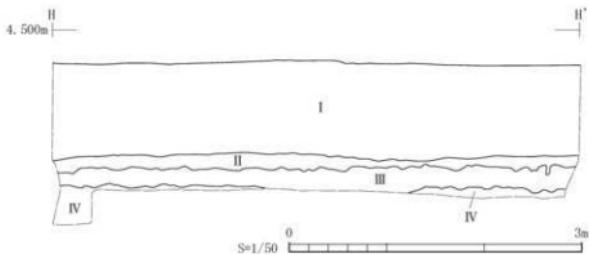
II層 黒褐色粘土、現代の水田耕作土で、厚さは6～20cmである。

III層 酸化鉄や灰白色火山灰粒子を班状含んだ黄褐色粘土で、厚さは6～20cm。遺構検出面である。

IV層 粒子の細かい暗灰褐色の砂質土で、厚さは50cm以上である。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区北壁断面

(2) 発見遺構 (第3図)

調査区全域でS X1899小溝群 (SD1900～1902、SD1909・1910) と溝跡1条 (SD1903) を発見した。
S X1899小溝群 (第3図)

【位置・形態】調査区のほぼ全域で、小溝跡を5条発見した。これらの小溝跡は、SD1901と1910、SD1902と1909は、同一線上にあり、SD1900を含めて3条の溝跡はほぼ同一間隔にある。また、規模・埋土に共通点が見られることから、これらを一連の遺構として取り扱う。

【重複】なし

【方向・規模】南西から北東方向に延びるもので、傾きは北で東に36° 傾している。溝跡の間隔は1.2m前後で、規模は長さ1.7～3.8m以上、上幅は18～35cm、深さは4～15cmである。

なお、SD1902については、北壁でこの延長を確認することができなかった。

【壁・底面】壁は底面より緩やかに立ち上がるもの (SD1900～1902、SD1909) と垂直気味に立ち上がるもの (SD1910) がある。底面は凹凸があるもの (SD1900・1902) と平坦なもの (SD1901・1909・1910) がある。

【埋土】単層のものと、2層に分けられるものがある。前者には、灰オリーブ粘土 (SD1900) や黄褐色粘土を含んだ灰オリーブ粘土 (SD1902) である。後者は、上層は灰オリーブ粘土、下層は黄褐色粘土 (SD1901・1909・1910) である。

【出土遺物】遺物は出土していない。

SD1903溝跡 (第3図)

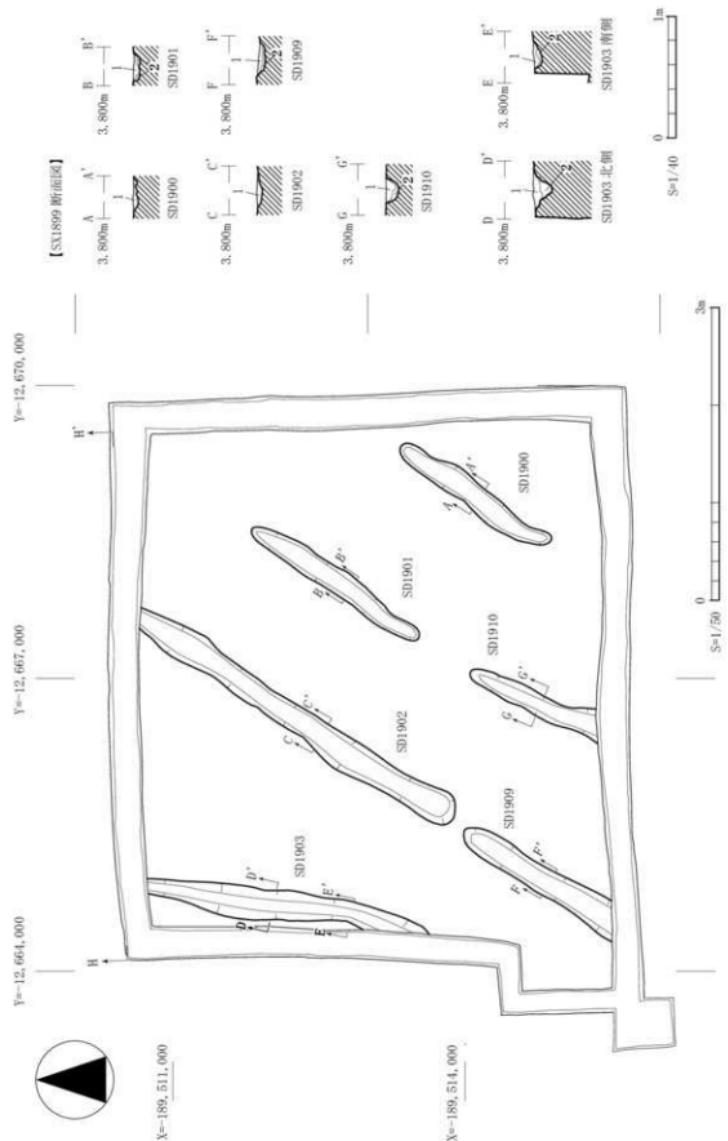
【位置・形態】調査区西端部で発見した。

【方向・規模】南西から北東方向に延びるもので、傾きは北で約10° 東に傾している。

【重複】なし

【壁・底面】壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦である。規模は長さ2.6m以上、上幅は20～34cm、深さは8～15cmである。

【埋土】2層に分けられる。上層は灰白色火山灰粒子を含んだ灰オリーブ粘土、下層は黄褐色粘土である。



第3図 遺構平面・断面図

【出土遺物】遺物は出土していない。

3 まとめ

- (1) 今回発見した小溝群の年代については、遺物が出土していないため詳細は不明である。周辺の調査成果を見ると、東側近接地で実施した第88次調査区では、灰白色火山灰降下以前のものが2時期、降下以降のものが1時期確認されている。本調査で確認したS X1899小溝群は前者、S D1903溝跡が後者に相当するものと考えられる。
- (2) 小溝群については、当該区周辺の調査（山王遺跡第83・137・138次）においても発見されており、烟跡と理解されていることから、このような煙跡が広範囲に展開していることが確認できた。



遺構完掘状況（南より）

VII 山王遺跡第155次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字町地内における個人住宅新築工事に伴う確認調査である。平成27年11月、地権者より当該地区における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅の基礎工事の際に、直径20cm、深さ5.5mの杭状改良杭を43箇所に施すことから、遺跡への影響が懸念された。このため、遺跡の内容を把握するための確認調査を実施することについて協議を重ね、11月26日に地権者から調査に関する依頼・承諾の提出を受けて確認調査の実施に至ったものである。

調査は、11月30日から、重機による住宅建築部分の表土（I層）除去に取りかかり、現表土下1.4m下の黒褐色粘質土を含む暗オリーブ褐色砂質土（IV層）上面でSD1879溝跡を確認した。12月1日より作業員を動員し、SD1879溝跡の精査と擾乱の掘り下げを行ったところ、残存していたII層上面よりSK1878土壤を確認した。7日には排水用の側溝を東西それぞれの壁際に掘って断面を観察した。その結果、西壁の断面でSD1879溝跡がIII層より掘り込まれていることがわかった。また、東壁の断面でIII層下面に溝跡と考えられる遺構を確認したため、部分的にIII層を堀り下げたところ、IV層上面でSD1881～1884溝跡及びSK1885土壤を検出した。さらに、それらの溝跡の続きを確認する過程で、V層上面よりP1柱穴とSD1886溝跡を検出した。10日以降は、調査区全景の写真撮影、平面・断面図作成を行い、16日には実測基準点の移動を行った。17日に調査器材を撤収し、18日には重機による埋め戻しを行い、本調査的一切を終了した。

2 調査成果

（1）層序

今回の調査では、現在の表土以下5層の堆積を確認した。

I層：現代の造成による表土及び盛土で、厚さは約1mである。

II層：調査区の全域で確認した。焼土や炭化物を多く含む黒褐色粘質土で、厚さは5～23cmである。

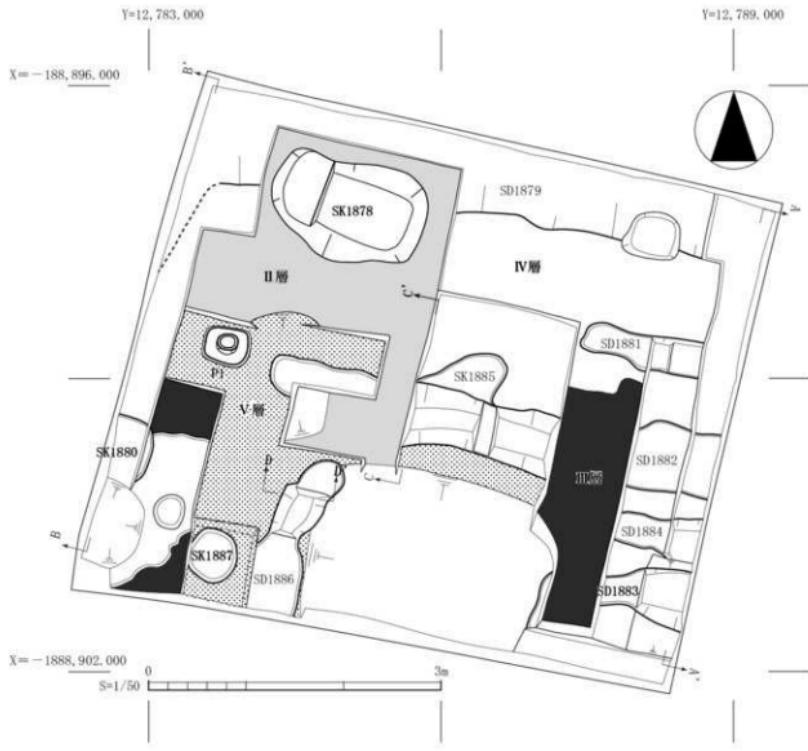
III層：調査区の中央から南側にかけて確認した。焼土や炭化物を含む暗褐色粘質土で、厚さは15～26cmである。灰白色火山灰をブロック状に包含することから、10世紀前葉以降の堆積であることが明らかである。古代の遺構検出面である。

IV層：調査区の中央から北側にかけて確認した。黒褐色粘質土を含む暗オリーブ褐色砂質土で、厚さは5～15cmである。古代の遺構検出面である。

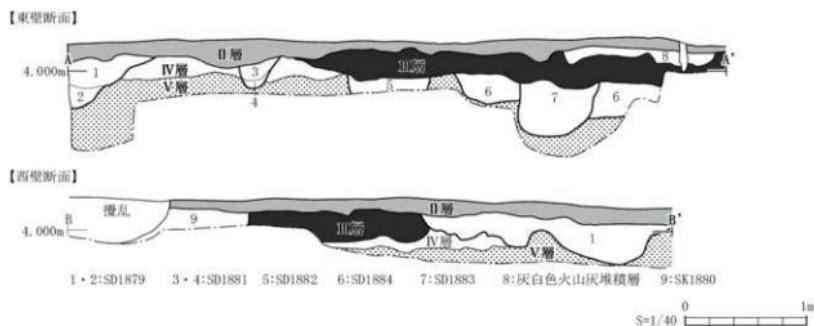
V層：調査区の全域で確認した。オリーブ褐色粘質土である。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区平面図



第3図 東壁及び西壁断面図

(2) 発見遺構と遺物

今回の調査では、V層上面で溝跡1条、土壌1基、柱穴1基を、IV層上面で溝跡4条、土壌1基を、III層上面で溝跡1基と土壌1基を、II層上面では土壌1基を確認した(第4図)。

V層上面検出遺構

S D1886溝跡(第2・4図)

【位置】調査区南部で発見した、南北方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は北で約20度東に偏している。規模は長さ1.6m以上、幅約40cm、深さは15cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がっており、底面は丸みを帯びて窪んでいる。

【埋土】炭化物及び焼土が混入する黒褐色粘質土である。

【遺物】検出面より土師器坏(B II類)・甕(B類)、須恵器坏が出土している。

S K1887(第2図)

【位置】調査区南西部で発見した。

【平面形・規模】平面形はほぼ円形で、規模は直径56cmである。

【埋土】焼土が混入する黄灰色粘質土である。

【遺物】出土していない。

IV層上面検出遺構

S D1881溝跡(第2・3図)

【位置】調査区東部で発見した東西方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は西で約9度北に偏している。規模は長さ1.6m以上、幅37cm、深さ24cmである。

【壁・底面】壁は凹凸がほとんどなく、急角度に立ち上がる。底面は丸みを帯びて窪んでいる。

【埋土】2層に分けることができる。1層は炭化物及び焼土が多く混入する黒褐色粘質土である。2層はV層由来のオリーブ褐色粘質土がブロック状に少量混入する黒褐色粘質土である。

【遺物】出土していない。

S D1882溝跡(第2・3・5図)

【位置】調査区中央で発見した、東西方向の溝跡である。

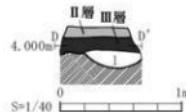
【重複】SK1885と重複し、それより新しい。

【方向・規模】方向は西で約11度北に偏している。規模は長さ4.6m以上、幅55cm、深さ32cmである。

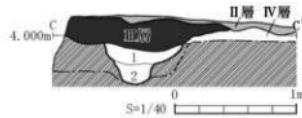
【壁・底面】壁は下方がおよそ垂直に、上方は比較的急角度に立ち上がっている。底面は丸みを帯びて窪んでいる。

【埋土】2層に分けることができる。いずれもV層由来のオリーブ褐色粘質土が小ブロック状にわずかに混入する黒褐色粘質土が主体であり、炭化物及び焼土が認められる。2層には砂が混入する。

【遺物】1層より土師器坏(B V類)・甕(B類)、須恵器が出土している。



第4図 S D1882溝跡断面図



第5図 S D1882溝跡断面図

S D 1883溝跡（第2・3図）

【位置】調査区南東部で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】S D 1884と重複し、それより新しい。

【方向・規模】方向はほぼ東西の座標に沿っている。規模は長さ90cm以上、幅は最大で62cm、深さは最深47cmである。

【壁・底面】壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸みを帯びて窪んでいる。

【埋土】炭化物が混入する黒色粘土である。

【遺物】出土していない。

S D 1884溝跡（第2・3図）

【位置】調査区東部で発見した、東西方向の溝跡である。西側は攪乱により壊されている。

【重複】S D 1883と重複し、それより古い。

【方向・規模】方向は西で約9度北に偏している。規模は長さ1.5m以上、幅1.6m以上、深さ30cmである。

【壁・底面】壁は北側では外反しながら立ち上がる。底面の高さはSD1883を境に北側が南側よりも13cm高くなっている。

【埋土】V層由来のオリーブ褐色粘土をブロック状に含む黒褐色粘土である。

【遺物】出土していない。

S K 1885土壤（第2図）

【位置】調査区中央で発見した。

【重複】S D 1882と重複しており、それより古い。

【平面形・規模】S D 1882に壊されており、平面形の詳細は不明である。規模は長軸59cm以上、短軸54cmである。

【埋土】炭化物及び焼土が混入する灰褐色粘質土で、V層由来のオリーブ褐色粘質土を斑状に含む。

【遺物】土師器甕（B類）、須恵器坏が出土している。

Ⅲ層上面検出遺構

S D 1879溝跡（第2・3・6図）

【位置】調査区北部で発見した東西方向の溝跡であり、東側では南に延びている。

【方向・規模】方向は西で10度北に偏している。規模は長さ5.9m以上、幅62cm以上、深さ約40cmである。

【壁・底面】西壁の断面でみると、北側は比較的急に立ち上がり、南側は凹凸しながら緩やかに立ち上がっている。

【埋土】2層に分けることができる。1層は焼土・遺物を多く含む黒褐色粘質土で、2層はそれにぶい黄橙粘質土を少量含む。底面は起伏が著しく平坦ではない。

【遺物】1層からは須恵系土器坏・土師器坏（B I・B V類）、土師器甕（B類）、須恵器坏・甕・壺、平瓦（IIc類）が出土している。2層からは須恵系土器坏・高台付坏・土師器坏（B V類）、甕（B類）、須恵器坏（II類）・甕・壺、灰釉陶器が出土している。

S K1880土壤 (第2・3図)

【位置】調査区南西部で発見した。

【平面形・規模】平面形は、調査区外に拡がるほか、攪乱に壊されており詳細は不明である。

【埋土】黒褐色粘質土である。

【遺物】土師器壺(B類)、須恵器瓶が出土している。

II 層上面検出遺構

S K1878土壤 (第2・6図)

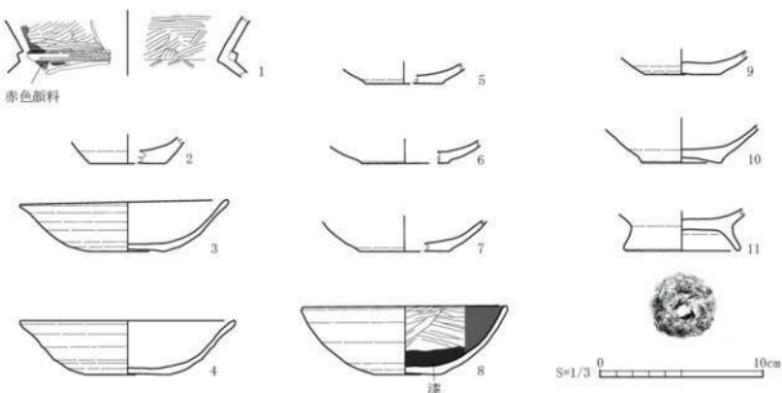
【位置】調査区北西部で確認した。

【平面形・規模】平面形は不整形である。規模は長軸1.6m、短軸1.1mである。

【壁・底面】壁は急に立ち上がっており、底面は平坦である。

【埋土】焼土を少量含む黄灰色粘質土である。

【遺物】古墳時代前期の土師器壺、須恵器が出土している。



(単位: cm)

| 番号 | 種類 | 遺構 層位 | 特徴 | | 口径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録 番号 | 備考 |
|----|-------------|--------------|------------------------------------|--------------------|----------------|---------------|-----|----------|----------|---------|
| | | | 外面 | 内面 | | | | | | |
| 1 | 土師器 壺 | SK1878 1層 | 口縁: ヨコナダ→ヘラミガキ 体部: ロクロナダ、赤色顔料付着 | ヨコナダ→ヘラミガキ | — | — | — | 1-1 | R4 | 突端に刺突文様 |
| 2 | 須恵器 壺 | LIII | ロクロナダ 底部: 回転系切り | ロクロナダ | — 0/24 | (4.6) 5/24 | — | | R8 | |
| 3 | 須恵器 壺 | LIII | ロクロナダ 底部: 回転系切り | ロクロナダ | 12.7 18/24 | 4.7 24/24 | 3.0 | 1-2 | R15 | |
| 4 | 須恵器 壺 | LIII | ロクロナダ 底部: 回転系切り | ロクロナダ | (13.2) 9/24 | 5.0 24/24 | 3.3 | | R24 | |
| 5 | 須恵器 壺 | SD1879 1層 | ロクロナダ 底部: 摩滅により不明 | ロクロナダ | — 0/24 | (4.7) 9/24 | — | | R5 | |
| 6 | 須恵器 壺 | SD1879 1層 | ロクロナダ 底部: 回転系切り | ロクロナダ | — 0/24 | (5.3) 5/24 | 1.9 | | R6 | |
| 7 | 須恵器 壺 | SD1879 1層 | ロクロナダ 底部: 回転系切り | ロクロナダ | — 0/24 | (5.8) 8/24 | 1.9 | | R10 | |
| 8 | 土師器 壺 | SD1879 2層 | ロクロナダ 底部: 回転系切り | ヘラミガキ、黒色処理、 漆付着 | 12.5 24/24 | 4.1 24/24 | 4.2 | 1-3 | R14 | |
| 9 | 須恵器 壺 | SD1879 2層 | ロクロナダ 底部: 回転系切り | ロクロナダ | — 0/24 | 4.6 24/24 | — | | R12 | |
| 10 | 須恵器 壺 | SD1879 2層 | ロクロナダ 底部: 回転系切り | ロクロナダ | — 0/24 | 4.8 24/24 | — | | R11 | |
| 11 | 須恵器 高台付壺 | SD1879 2層 | ロクロナダ 底部: 回転系切り→ロクロナダ | ロクロナダ | — 0/24 | 6.9 19/24 | — | | R3 | |

第6図 S D1879溝跡ほか出土遺物

3 まとめ

本調査の成果について、以下検出面ごとに遺構の年代を中心としてまとめる。

【V層上面】

S D1886溝跡、S K1887土壤、P 1柱穴がある。S D1886溝跡とP 1柱穴の掘方から土師器壺B類が出土しており、8世紀後葉以降の年代が推測される。また、灰白色火山灰を含むIII層との関係から、10世紀前葉以前のものである。

なお、出土した遺物をみると、IV層上面で検出した遺構の遺物と明確な年代差がみられないことと、V層上面で検出した遺構の直上にIV層が見られないことから(註1)、本来はIV層上面の遺構であったことも考えられる。

【IV層上面】

S D1881～1884溝跡、S K1885土壤がある。出土した遺物が少量ではあるが、S D1882溝跡とS K1885土壤から土師器壺B類が出土していることと、III層との関係から、8世紀後葉以降～10世紀前葉以前に機能していたことが考えられる。また、S D1881・1882・1883溝跡の方向が近似していることから、同時期に機能していた可能性もある。

【III層上面】

S D1879溝跡、S K1880土壤がある。III層に灰白色火山灰が認められることから、10世紀前葉以降のものとわかる。さらに、III層及びS D1879溝跡から出土した須恵系土器には小型壺が含まれていない。須恵系土器が大型の壺類に限られるといった特徴をもつ土器群は、多賀城跡の土器編年A～Fの各土器群のうちE群土器に見られる。以上のことからIII層は10世紀前葉以降に堆積し、S D1879溝跡は10世紀前半までに廃絶したものと考えられる。

【II層上面】

S K1878土壤がある。出土した遺物は古墳・古代時代の土器のみであり、年代を決定する遺物は出土していない。一方、S D1886溝跡を検出する際に、残存していたと考えられるII層から磁器片や陶器捕鉢片が出土したことから、中世以降のものと考えられる。

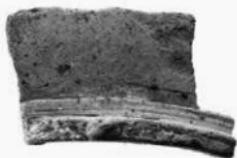
参考文献

- 1 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政府跡 図録編』1980
- 2 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政府跡 本文編』1982
- 3 東北学院大学学術研究会『東北学院大学論集 歴史学・地理学 第27号』1995
- 4 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998
- 5 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報2006』2007
- 6 多賀城市教育委員会『多賀城市文化財調査報告書第125集 八幡沖遺跡第9次調査一災害公営住宅多賀城市宮内地区整備に係る埋蔵文化財発掘調査一』2015

註1：東壁断面でみると、IV層はIII層に掘り込まれており、底面値はIII層の方が5cmほど低いことがわかる。このことから本来調査区全域に堆積していたIV層は、調査区の中央から南部にかけてIII層による削平をうけた可能性もある。



調査区全景（南より）



土師器壺(S K1878 第6図1 R 4)



須恵系土器壺(III層 第6図3 R 15)



土器壺(S D1879 第6図8 R 14)



土器壺(俯瞰: S D1879 R 14)

写真図版4

VIII 山王遺跡第156次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字山王二区地内における一戸建て賃貸住宅建設に伴うものである。平成27年6月26日に、地権者より当該地区における宅地造成工事と埋蔵文化財とのかかわりについての文書が提出された。建築計画では、住宅の基礎工事と給排水管理設工事として、それぞれ22～42cm、0.44～1mの掘削を伴うものであった。本調査区の南側の調査成果によると、現地表面から遺構検出面までの深さは80～90cmであることを確認していることから、ほとんどの工事については盛土内に収まるものであったが、対象面積が856m²と広範囲に及ぶことから、確認調査を実施することとなった。その後、平成27年12月4日に地権者より、調査に関わる依頼・承諾書の提出を受けて、現地調査の実施に至ったものである。

調査は12月7日より開始した。はじめに対象地内に3ヶ所の調査区（1～3T）を設け、重機を使用して1Tから表土掘削を行った。表土掘削が終了した9日から作業員を動員して遺構検出作業に入り、各調査区で土壤、溝跡、小溝跡、柱穴を検出した。14日から翌日にかけて調査区毎に全景写真撮影を行い、その後、任意の基準点を設け平面・土層断面図を作成した。16日、平面図に標高値を記入して図面の作成を終了した。17日、任意の基準点に国土座標を与えた。19日には埋め戻し作業を行い、全ての調査を終了した。

2 調査成果

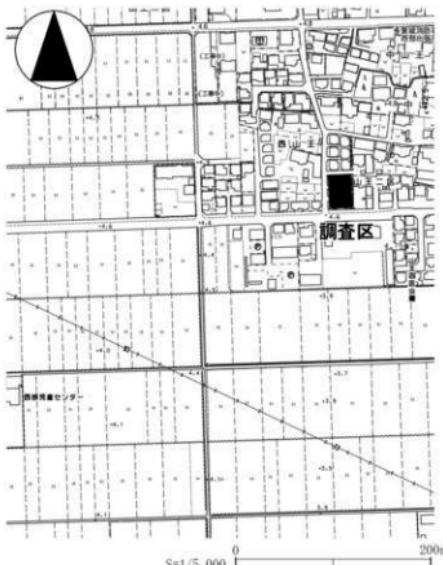
(1) 層序

今回の調査では、現表土（盛土）を含め3層の堆積を確認した。

I層 現代の盛土層であり、厚さは1.2mである。

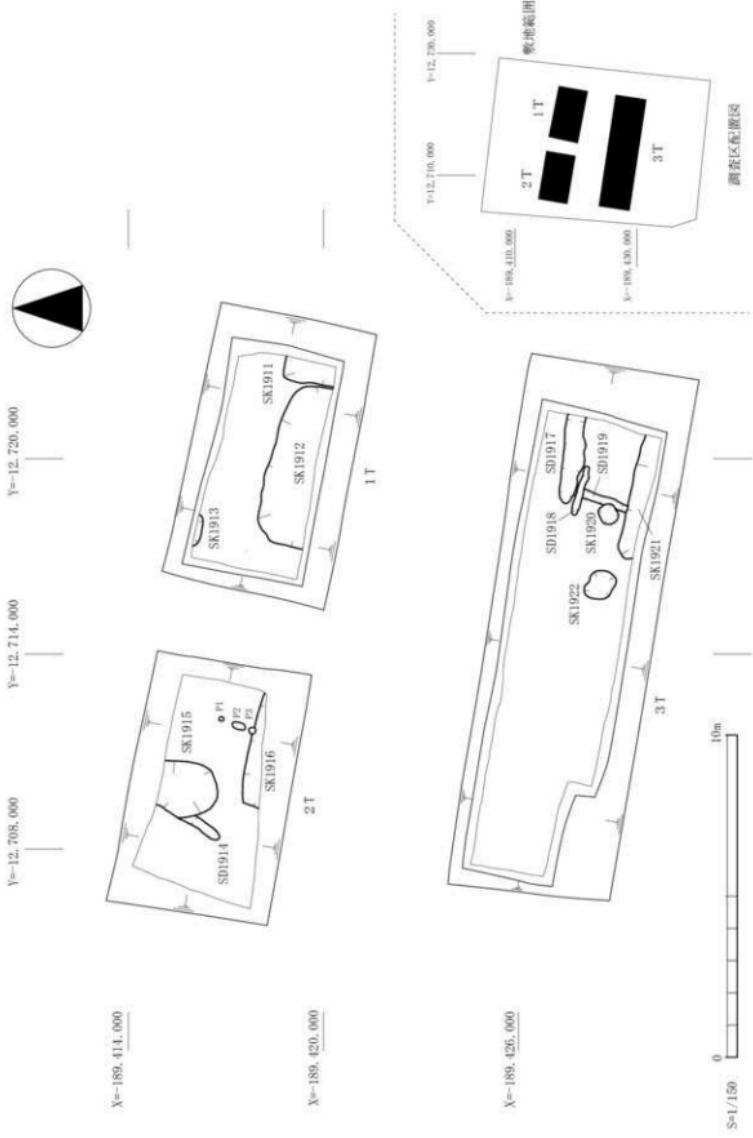
II層 古代から近世の遺物を含む、厚さ20cm前後の黒褐色である。

III層 黄灰色砂質土であり、II層との層離面で灰白色火山灰の二次堆積を確認している。本調査の遺構検出面である。



第1図 調査区位置図

第2図 透構平面図



(2) 発見遺構（第2図）

調査区毎に概要を説明する。

【1 T】

調査対象地の北東部に設定した調査区である。調査は、原則として遺構検出のみにとどめているので、壁・底面の状況については不明である。また、検出した遺構からは、遺物は出土しなかった。

S K1911（第2図）

【位置】調査区の南東隅で検出した。

【重複】なし

【平面形・規模】方形を呈するものと見られる。遺構は調査区の東南部に延びて行く。確認できた規模は東西0.7m以上、南北1.6m以上である。

【埋土】黒色粘質土及びにぶい黄色粘質土をブロック状に含んだ褐灰色粘質土である。

S K1912（第2図）

【位置】調査区の南半部で検出した。

【重複】なし

【平面形・規模】方形を呈するものと見られる。遺構の本体は調査区南側に延びて行く。確認できた規模は東西5m以上、南北1.5m以上である。

【埋土】黒色粘質土及びにぶい黄色粘質土を含んだ褐灰色粘質土である。

S K1913（第2図）

【位置】調査区の北西隅で検出した。

【重複】なし

【平面形・規模】方形を呈するものと見られる。遺構の本体は調査区北半部に延びて行く。確認できた規模は東西1m以上、南北20cm以上である。

【埋土】黒色粘質土及びにぶい黄色粘質土をブロック状に含んだ淡黄色粘質土である。

【2 T】

調査対象地の北西部、1Tの西側に設定した調査区である。

S D1914（第2図）

【位置・形態】調査区の北半部西側で検出した。

【重複】S K1915と重複し、これより古い。

【方向・規模】南西方向から北東方向に延びる。傾きは北で約36° 東に偏している。確認できた規模は長さ約1.2m以上、上幅30cm前後である。

【埋土】黒褐色粘質土を斑状に含んだにぶい黄褐色土である

S K1915（第2図）

【位置】調査区の北半部中央で検出した。

【重複】S D1914と重複し、これより新しい。

【平面形・規模】梢円形を呈するものと見られる。遺構の北側は調査区外に延びて行く。確認できた規模は東西約1.5m以上、南北約1.7m以上である。

【埋土】 黒色粘質土である。

S K1916 (第2図)

【位置】 調査区の南東部で検出した。

【重複】 柱穴と重複し、これより古い。

【平面形・規模】 方形を呈するものと見られる。遺構の本体は調査区外に延びて行く。確認できた規模は東西3.6m以上、南北60cm以上である。

【埋土】 黒色粘質土。

柱穴 (第2図)

【位置】 調査区東側で3基 (P 1～P 3) 検出した。

【重複】 P 3はS K1619と重複し、これより新しい。

【平面形・規模】 円形または南北に長い方形である。P 1・P 3は径14～20cm、P 2は東西21cm、南北40cmである。

【埋土】 P 1はにぶい黄色土、P 2・P 3は暗褐色土である。

【3 T】

1・2 Tの南側に設定した調査区である。

S D1917 (第2図)

【位置・形態】 調査区東側で検出した。

【重複】 S D1920と重複し、これより新しい。

【方向・規模】 東西方向の溝跡で、延びは調査区東側に延びて行く。傾きは西で約7°北に偏している。確認できた規模は長さ約2.7m以上、上幅49～65cmである。

【埋土】 黒色粘質土と明黄褐色を斑状に含んだ褐色粘質土である。

S D1918 (第2図)

【位置・形態】 調査区東、S D1918の南側で検出した。

【重複】 S D1920と重複し、これより新しい。

【方向・規模】 東西方向の溝跡である。傾きは西で約16°北に偏している。規模は長さ約1.6m、上幅15～25cmである。

【埋土】 黄褐色土を斑状に含んだ暗褐色土である。

S D1919 (第2図)

【位置・形態】 調査区東側で検出した。

【重複】 重複関係のあるすべての遺構より古い。

【方向・規模】 南北方向の溝跡である。傾きは北で約19°東に偏している。確認できた規模は長さ約1.7m以上、上幅21～28cmである。溝跡の両端は、北側をS D1918に南側をS K1923によって失なわれている。

【埋土】 暗褐色土を斑状に含んだにぶい黄褐色土である。

S K1920 (第2図)

【位置】 調査区東側で検出した。

【重複】SD1920と重複し、これより新しい。

【平面形・規模】隅丸の方形である。規模は東西52cm、南北62cmである。

【埋土】黒褐色土を斑状に含んだ灰黄褐色土である。

S K1921 (第2図)

【位置・形態】調査区の南東隅で検出した。

【重複】SD1920と重複し、これより新しい。

【平面形・規模】方形を呈するものと見られる。遺構の延びは調査区東南部に延びて行く。確認できた規模は東西3.6m以上、南北60cm以上である。

【埋土】黒色粘質土。

S K1922 (第2図)

【位置】調査区中央部東側で検出した。

【重複】なし。

【平面形・規模】不整形である。規模は東西1m前後、南北75cm前後である。

【埋土】黒色粘質土とにぶい黄橙色土を含んだ褐灰色粘質土である。

(2) 堆積層出土遺物

II層からは、土師器壺・甕、須恵器甕・蓋、近世陶器擂鉢、陶磁器（染付：肥前産）、錢貨（寛永通宝）、不明鉄製品が出土している。

3 まとめ

(1) 3ヶ所の調査区からは溝跡4条、土壙8基、柱穴3基を発見した。

(2) これらの遺構の年代については、遺物が出土していないため、年代の決め手に欠けるが、遺構の検出面となっているII層との層離面で、灰白色火山灰の二次堆積を確認している。今回発見した遺構の埋土には灰白色火山灰は認められないことから、10世紀前葉頃にはすでに埋没していたと考えられる。



1T 遺構検出状況（南西より）



2T 遺構検出状況（南東より）



3T 遺構検出状況（西より）

IX 市川橋遺跡第91次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、城南二丁目地内における個人住宅新築に伴うものである。平成27年10月、地権者より当該区における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅の基礎工事の際に直径20cm、深さ8.7mの杭状地盤補強を38箇所で施すことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺跡保存の協議を行ったものの、申請どおりの工法で着手することに決定したことから、本発掘調査を実施することとなった。10月27日に地権者から発掘調査に関する依頼・承諾の提出を受け、11月4日より現地調査を開始した。

はじめに、重機による住宅建築部分の表土除去から取りかかり、現表土の約1.8m下にあるにぶい黄色粘質土(IV層)及び黄灰色粘質土(S X 3546・1層)上面で、S B 3540・3541掘立柱建物跡やSD 3544溝跡などを確認した。5日より作業員を動員し遺構の精査及び掘り下げ作業を開始したが、S B 3540柱穴の断割り調査の途中で、大量の湧水が溢れ出し、以後この排水処理に多くの時間を割かれることとなった。11日、任意の実測基準点を設置し、平面図作成に取り掛かった。17日、調査区の全景写真撮影を行った後に、各柱穴及び調査区壁面の断面図を開始した。19日、任意の基準点に座標移動を行うと共に、調査器材の撤収を行った。25日、重機による埋め戻しを行い、本調査的一切を終了した。



第1図 調査区位置図

2. 調査成果

(1) 層序 (第3図)

今回の調査では、現在の表土以下4層の堆積を確認した。

I層：現代の盛土及び旧耕作土である。I 1層は宅地造成に伴う盛土であり、厚さは1.1～1.2mである。I 2層は造成前の水田耕作土であり、厚さは15～20cmである。

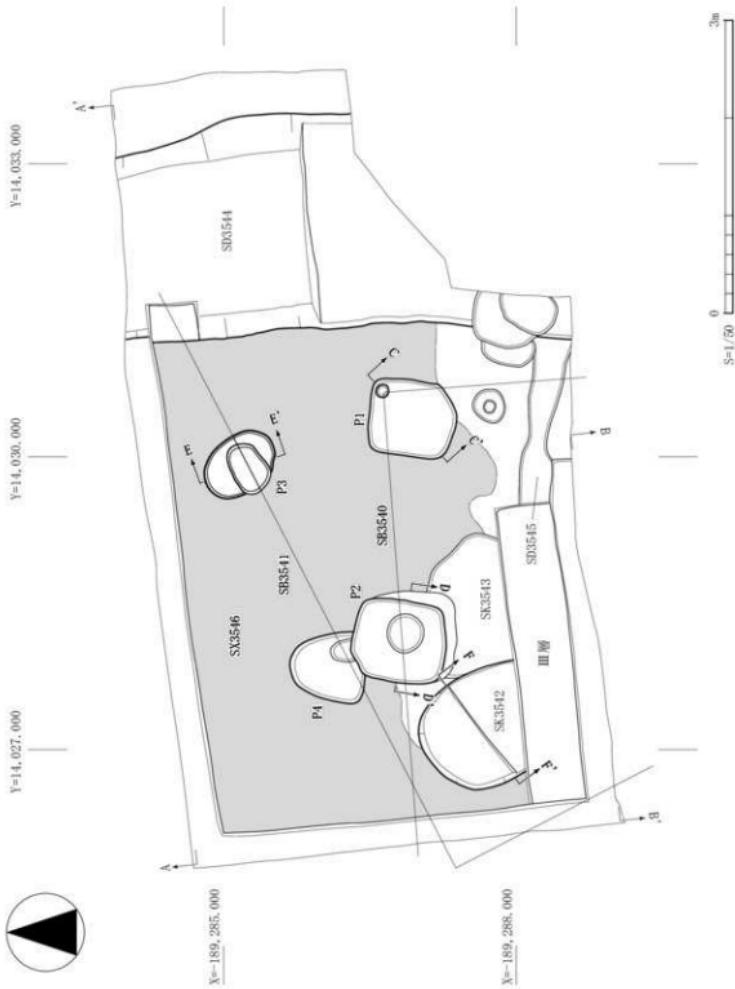
II層：炭化物や焼土が多く混入する黒褐色粘質であり、厚さは5～20cmである。

III層：炭化物が僅かに混入する暗灰黄色粘質土であり、厚さは4～20cmである。

IV層：南端の一部を除き認められる古代の整地層(S X 3546)である。2層に細分することができ、上層が黄灰色粘質土、下層はにぶい黄色粘質土が多量に混入する灰黄色粘土である。厚さは4～18cmであるが、地形的に低くなっている北側により厚く施されている。

V層：にぶい黄色粘質であり、厚さは30cm以上である。本地区周辺で確認される、古代の最終遺構検出面である。

第2図 遺構平面図



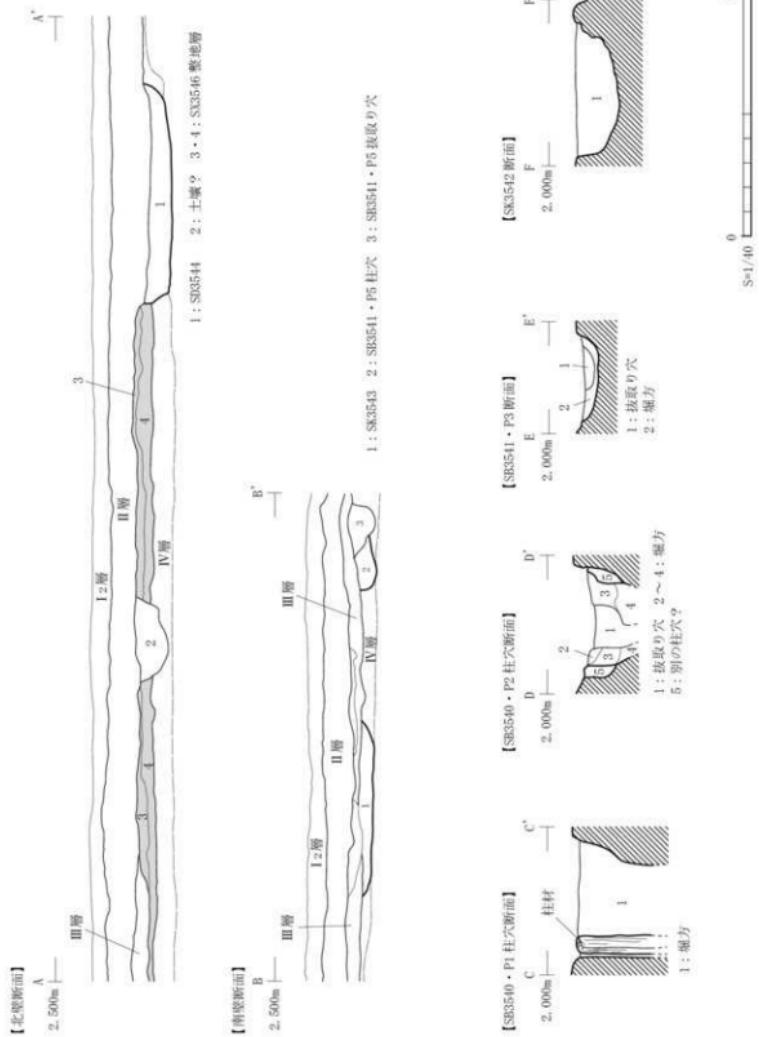


図3 調査区壁面及び構造面

(2) 発見遺構と遺物

今回の調査では、V層及びS X3546整地上面で、掘立柱建物跡や溝跡、土壤を発見した。

S B3540掘立柱建物跡（第2・3図）

【位置】調査区中央から西側に位置し、調査区西側及び南側に延びる。

【重複】S B3541、S K3542・3543と重複し、S B3541、S K3543よりも新しい。

【桁行・梁行】東西2件以上であり、今回確認した柱列は位置関係より北側柱列と考えられる。

【柱痕跡・抜取穴の有無】柱穴は2基(P 1・2)検出しており、P 1で柱材、P 2で柱抜取り穴を確認した。

【方向・規模】北側柱列で測ると、方向は東で約5度北に偏しており、柱間は約2.5mである。

【掘方の平面形・規模・埋土】平面形はおよそ方形であり、規模はP 2で測ると、長辺95cm、短辺85cm、深さ50cm以上である。埋土は、P 1ではオリーブ褐色粘質土、P 2ではにぶい黄色粘質土が多く混入する黄灰色粘土が主体である。

【P 1柱材の形状・規模】北東隅に、壁に接するように立てられている。直径20cmの円形であり、残存する長さは63cmである。

【P 2柱抜取穴の形状・規模・埋土】平面径は円形であり、規模は直径40cmである。検出面より約40cm下方で直径18cmに窄まり、底面に達すると考えられる。埋土はにぶい黄色土や炭化物が混入する黄灰色粘土である。

【遺物】掘方から土師器坏（B I・II類）・甕（B類）、須恵器坏（II・III類）・甕、抜取り穴から須恵器甕が出土している。

S B3541掘立柱建物跡（第2・3図）

【位置】およそ中央から南側に位置し、調査区南側及び東側に延びる。

【重複】S B3540、S D3544、S K3542・3543と重複し、S B3540、S D3544よりも古い。

【桁行・梁行】東西3件以上であり、今回確認した柱列は位置関係より北側柱列と考えられる。

【柱痕跡・抜取穴の有無】柱穴は3基(P 3・4・5)検出しており、全ての柱穴で柱抜取り穴を確認した。

【方向・規模】北側柱列で測ると、方向は東で約27度北に偏しており、柱間は約2.3mである。

【掘方の平面形・規模・埋土】平面形は不整形であり、規模はP 3で測ると、長軸75cm、短軸55cm、深さ20cmである。埋土は、にぶい黄色粘質土が多く混入する黄灰色粘質土である。

【柱抜取穴の形状・規模・埋土】平面径は楕円形に近く、規模はP 3抜取り穴で長軸55cm、短軸40cm、深さ約20cmである。埋土は地山ブロックや炭化物が僅かに混入する黄灰色粘土である。

【遺物】出土していない。

S D3544溝跡（第2・3図）

【位置・形態】調査区東部で確認した、南北方向の溝跡である。

【重複】S B3541と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は、北で約4度西に偏している。規模は長さ4.5m以上、上幅1.9～2.2m、下幅1.6m、深さ24cmである。

【壁・底面】壁は東側が緩やかに、西側が急角度で立ち上がっている。底面にはほとんど起伏はなく、北側に向かって低くなっている。

【埋土】にぶい黄色粘質土が僅かに混入する黄灰色粘質土である。

【遺物】土師器（A・B類）、須恵器坏（III類）、高台付坏・蓋・甕が出土している。

S K3542土壤（第2・3図）

【位置】調査区南西部で発見した。

【重複】S B3540・3541、S K3543と重複し、S K3543よりも新しい。

【平面形・規模】平面形はおよそ円形であり、規模は東西1.2m、深さ40cmである。

【壁・底面】壁は西・北側が緩やかに、東側が急角度に立ち上がっている。底面は丸みを帯びて窪んでいる。

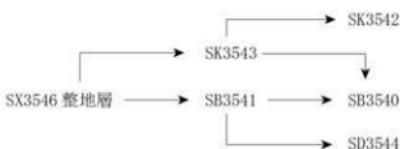
【埋土】黄灰色粘質土が主体であり、V層ブロックと炭化物粒が僅かに混入している。

【遺物】土師器甕（B類）、須恵器坏・蓋・甕、製塙土器が出土している。

3 まとめ

今回発見した遺構の新旧関係を整理すると、
第4図のようになる。

このうち、S B3540では、掘方から土師器坏
B I類が1点、B II類が1点、須恵器坏II類が
2点、III類が2点出土している。出土点数は少



第4図 遺構変遷図

ないものの、土師器坏では全て再調整が施されたものであることや、須恵器坏でもV類が認められないことなど、延暦9年（790）以前と考えている市川橋遺跡S X1351A・B期出土土器（多賀城市教育委員会2003）の様相と近似している。一方、土師器全体ではA類が全く含まれておらず、全てB類で占められている点は年代的に新しい要素であり、天長9年（832）を上限とする9世紀前葉頃とされる多賀城跡S E2101B III層出土土器（宮城県多賀城跡調査研究所1992）や、9世紀中葉頃とされる多賀城跡S K2167土壤出土土器（宮城県多賀城跡調査研究所1993）などに認められる。このことから、S B3540については、8世紀後葉～9世紀中葉頃の年代で捉えておきたい。これよりも古いS B3541については、これまでの周辺の調査成果から、当該区が8世紀後葉以降に整備されることが明らかであることから、この年代を遡るものではない。

S D3544は、新旧関係でS B3541よりも新しいものである。須恵器坏は全てIII類で占められているが、土師器甕ではA類が小片1点のみであり、B類が主体的であることから、延暦9～24年（805）に限定される市川橋遺跡S X1351C期出土土器（多賀城市教育委員会2003）や、9世紀前葉～中葉頃と考える同S X1351D期（多賀城市教育委員会2003）の範疇におさまるものと考えられる。

S K3542からは土師器甕B類が出土していることから、8世紀後葉が上限である。

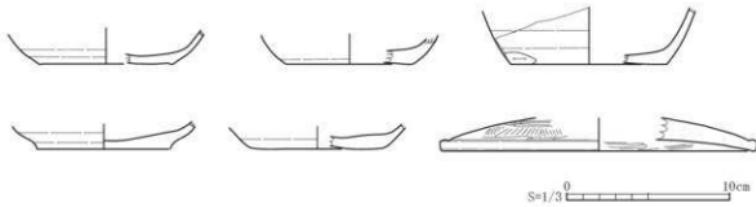
参考文献

多賀城市教育委員会『市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II一』多賀城市文化財調査報告書第

70集2003

宮城県多賀城跡調査研究所「第60次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』1992

宮城県多賀城跡調査研究所「第62・63次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』1993



(単位: cm)

| 番号 | 種類 | 遺構 部位 | 特徴 | | 口径 残存率 | 底径 残存率 | 器高 | 写真 図版 | 登録 番号 | 備考 |
|----|-------|-----------------|---------------------------|-------|----------------|----------------|----|----------|----------|--------------|
| | | | 外面 | 内面 | | | | | | |
| 1 | 須恵器 杯 | SB3549 P1・堰方 | ロクロナデ 底部: ヘラ切 | ロクロナデ | — | (8.05) 6/24 | — | — | R1 | III類 |
| 2 | 須恵器 杯 | SB3549 P1・堰方 | ロクロナデ 底部: ヘラ切 | ロクロナデ | — | (8.05) 6/24 | — | — | R2 | III類 |
| 3 | 須恵器 杯 | SB3549 P1・堰方 | ロクロナデ 底部: ヘラ切→手持ちヘラケズリ | ロクロナデ | — | (9.6) 5/24 | — | — | R3 | II a 類 |
| 4 | 須恵器 杯 | I層 | ロクロナデ 底部: ヘラ切 | ロクロナデ | — | (8.15) 7/24 | — | — | R5 | III類 ヘラ書き |
| 5 | 須恵器 杯 | I層 | ロクロナデ 底部: ヘラ切 | ロクロナデ | — | (8.0) 6/24 | — | — | R6 | III類 ヘラ書き |
| 6 | 須恵器 蓋 | I層 | 回転ヘラケズリ→ヘラミガキ | ヘラミガキ | (19.3) 6/24 | — | — | — | R7 | |

第5図 出土遺物



調査区全景（南東より）



S B 3540・P 1 断面



S B 3540・P 2 断面

X 西沢遺跡第26次調査

1 調査に至る経緯と経過

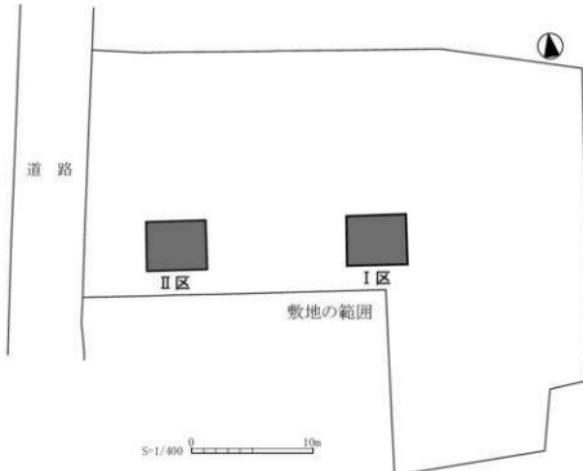
本調査は、建売住宅建設に伴う確認調査である。平成27年5月14日に申請者より当該地区における建売住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では造成面積が約1,000m²と広範囲であり、最大約80cmの盛土を行うものであった。住宅基礎工事は盛土上面から45cmの掘削を伴うものであるので、埋蔵文化財への影響は軽微と考えられた。しかし、近隣の調査では、溝やピットが発見されていることもあり、遺構の分布状況や構成を把握するため確認調査を実施することとした。

その後、平成27年7月3日に地権者より調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至ったものである。

調査は7月13日に実施した。調査区は通路部分の2カ所(I・II区)に設定した。重機を使用して表土の除去を行ったところ、0.8~1m下で地山面(岩盤)を検出した。精査の結果、いずれの調査区からも遺構は発見されなかった。遺物は、表土層から土師器の細片が数点出土した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



I区 調査区全景（北西より）



II区 調査区全景（北東より）

XI 西沢遺跡第27次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、浮島字沢前地区における住宅建設に伴うものである。平成27年10月15日に地権者より当該地区における住宅建築と埋蔵文化財とのかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、住宅部の基礎工事として35cmの掘削、側溝工事で60cm、ブロック設置工事で18cm、浸透トレーンチ管設置、工事で80cmの掘削、給排水管工事でも60cmの掘削を行う他、既設給水管の埋設状況を確認のために1.3m掘削するものであった。当該区周辺では遺構面までの深さが不明なため、事前に坪掘りを行ったところ、建物が建つ場所では盛土が0.5～1m以上に達していることを確認した。この結果、住宅建設に係る各掘削では盛土内に収まることが明らかとなったが、開発対象面積が約1,800m²と広範囲に及んでいることから、確認調

査を実施することとなった。その後、10月28日に地権者より、調査に関わる依頼・承諾書の提出を受けて現地調査の実施に至ったものである。

調査は11月4日より開始し、調査区は建物が建つ3ヶ所と既設給水管埋設部分1ヶ所の計4ヶ所（1～4T）を設定した。重機を使用して表土掘削を行った。各調査区で深さ1.5～1.7mまで掘り下がったが、盛土下に泥炭層が厚く堆積しており、遺構・遺物は発見できなかった。全景写真撮影後、調査区配置・土層模式図を作成し調査を終了した。

2 調査成果

(1) 層序

今回の調査では、各調査区（1～4T）で現表土（盛土）も含め2層の堆積を確認した。

I層 粘性の強い砂を含んだ暗灰黄色土と岩盤ブロックが混じった現代の盛土であり、厚さは1.1～1.3mである。

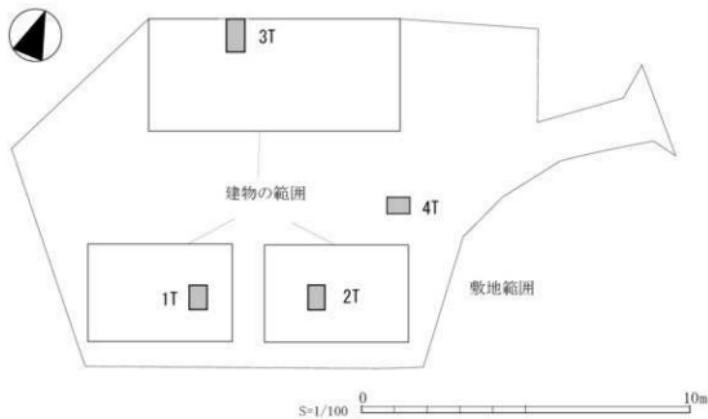
II層 しまりの強い黒褐色粘土で、厚さは30cm以上である。

3 まとめ

調査の結果、遺構・遺物は発見できず、泥炭層が厚く堆積している状況を確認した。今回の調査区は、東西の丘陵に挟まれた谷状地形の裾部に位置しており、低湿地が広がっていたと推定される。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



2T 堀削状況（北より）

XII 高崎遺跡第101次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、高崎1丁目地内における宅地造成工事に伴う試掘・確認調査である。平成26年10月に、地権者である開発業者より、高崎遺跡の北東部に位置する当該地における宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。当該地は緩やかな丘陵部に立地し、現在は一部がグランドとして利用されている。計画では、対象地のほぼ中央部に「山の字」状に4条の道路を設けるほか、中央部と東端部において切土を行うことから、遺跡への影響が懸念された。そのため、遺構の有無を確認し、存在する場合はその分布状況や構成を把握するとともに、本発掘調査にかかる事業量を積算するため試掘・確認調査を実施することで協議を進めた。その結果、同意が得られたことから、平成27年2月14日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、3月3日より現地調査を開始した。

調査においては、造成工事の際に切土以外の場所で行う盛土の厚さが10～30cmと薄いことから、当該地の全域を調査対象とした。はじめに、道路予定部に幅2m、長さ約10mの調査区を11箇所設定した。さらに、それらの間と周間に5箇所の調査区を設定して、重機による掘り下げを行った。その後、作業員を動員して西側から順に各調査区の精査を実施した。その結果、対象地西端部に設定した南北方向の3箇所の調査区（1～3トレンチ）では、厚さ0.8～1.3mの盛土がなされ、その下で検出した地山面（黄色ローム土）は昭和期の大きな掘削を受けていることを確認した。また、この南東側に設定した東西方向の調査区（10トレンチ）も同様であった。さらに、西側より一段高い対象地東端部に設定した南北方向の3箇所の調査区（14～16トレンチ）においても、厚さ0.8～1.2mの盛土がなされ、その下で検出した地山面は後世の掘削を受けていることを確認した。次に、対象地の中央部西寄りに設定した南北方向の3箇所の調査区のうち、北側の5トレンチでは構跡を検出した。遺構検出面の深さは地表面から約1m下であった。一方、南側の6トレンチでは厚さ20～25cmの表土の下は岩盤面であり、遺構は発見されなかった。この結果をうけて、遺構が検出された5トレンチの西側に幅1.6m、長さ約16mの東西方向の調査区（4トレンチ）を設定して、重機による掘り下げを行った。精査の結果、トレンチのほぼ全域で構跡、土壤、柱穴を発見した。同時に、4トレンチの南側約25mの位置に、平行する東西方向の調査区（9



第1図 調査区位置図

トレンチ）を設定して掘り下げを行ったが、大部分は西側の1～3トレンチと同様の状況であった。さらに、5トレンチの南側を拡張して、南隣のトレンチとつなげて精査を行ったが、遺構は発見されなかった。なお、この拡張部では厚さ20～50cmの表土の下は地山面及び岩盤面であり、南側の6トレンチと同様の状況であったことから、この付近は後世の削平を受けていると判断された。次に、対象地の中央部東寄りに設定した南北方向の調査区（7・8トレンチ）では、溝跡を発見した。遺構の分布状況は希薄で、南側の8トレンチでは岩盤面での検出であった。続いて、対象地南側に設定した東西方向の3箇所の調査区（11～13トレンチ）のうち、南端部の12トレンチでは、地表面から約10cm下の地山面で南北方向の溝跡を発見した。周囲の11トレンチと13トレンチでは、表土の下は前者が岩盤面、後者が地山面で、いずれも遺構は発見されなかった。調査は、これらの調査区の写真撮影、平面図作成の後、埋め戻しを行い、3月27日に終了した。

2 調査成果

今回の調査では、北端部の4・5トレンチ、中央部東寄りの7・8トレンチ、南端部の12トレンチで溝跡、土壤、柱穴を発見した。

このうち、4・5トレンチの遺構検出面は地表面から0.9～1.1m下と深く、当該地の旧地形は北側に傾斜していたと推定される。発見遺構のうち、溝跡は幅が30～50cmと小規模で、南北方向に斜行するものが多い。土壤は大部分が調査区外にかかるため、詳細は不明である。柱穴はいずれも平面形がほぼ円形で、直径は15～30cmである。調査区内では、配置などの規則性は見いただせなかった。

7・8トレンチ検出の4条の溝跡は、東西方向に延びるものと、南北方向に斜行するものがある。いずれも、埋土の色調が4・5トレンチ検出の各遺構とは異なり、しまりもやや弱い。

12トレンチ検出の南北方向の溝跡は、幅が1.0～1.4mと比較的規模の大きなものである。本調査区の南側で実施された高崎遺跡第43次調査（註1）で発見したSD1632溝跡と、位置、方向、規模などが一致することから、この延長部と考えられる。年代は、平安時代前半に位置付けられている。

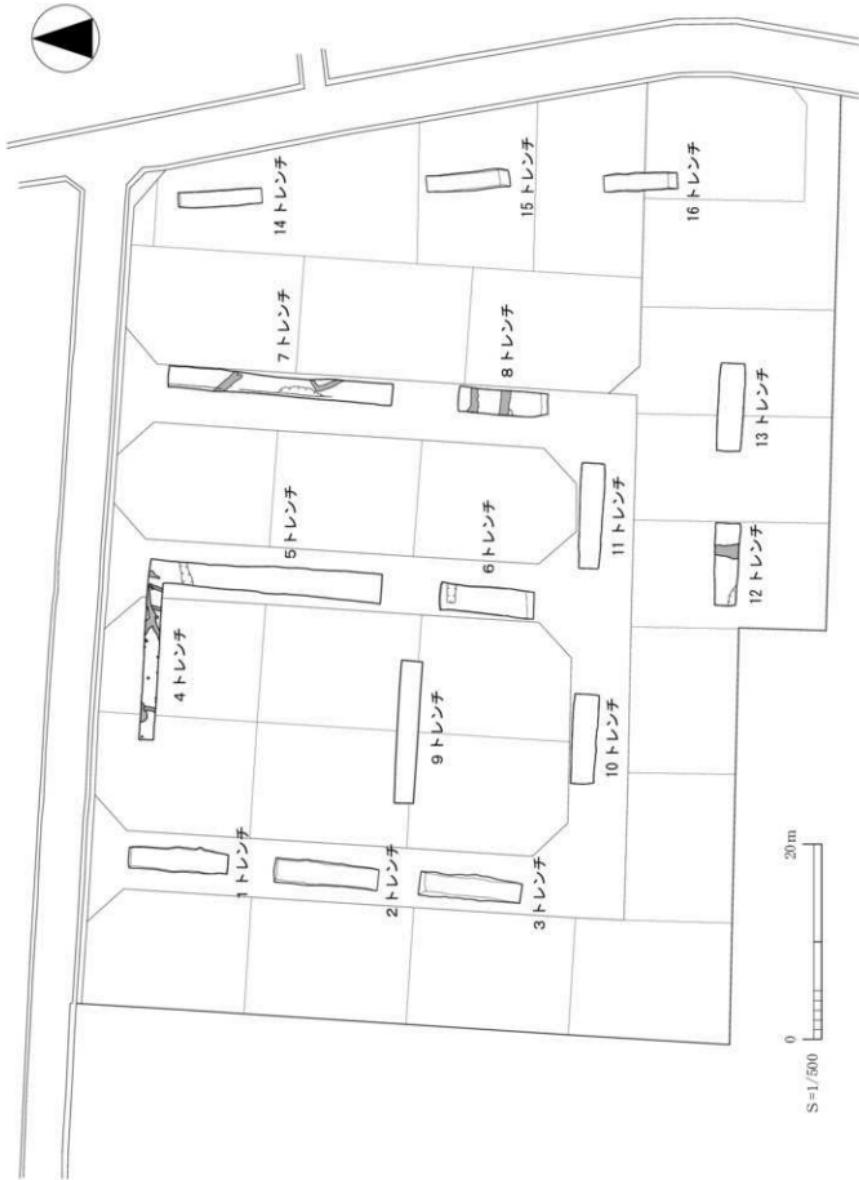
3 まとめ

本調査では、遺構の掘り下げを行っていないため、各遺構の年代等の詳細は把握していない。よって、分布状況などから調査成果をまとめると以下のようになる。

- (1) 調査対象地の中央付近の北端部から南端部にかけて、溝跡、土壤、柱穴を発見した。分布状況は、北端部を除き希薄である。
- (2) 調査対象地のうち、1～3・9・10トレンチが配置された区域は、昭和期の開発により遺構が失われていると考えられる。
- (3) 調査対象地の北西側から南東側にかけて、幅約40mにわたる帯状の範囲で後世の削平があったと推察される。よって、この範囲では地表面から10～25cm下で地山面及び岩盤面が現れる。また、明確に近世以前にさかのぼるような遺構は発見されなかった。

註1：多賀城市教育委員会『市川橋遺跡ほか一市川橋遺跡第47次調査・高崎遺跡第43次調査・八幡沖遺跡第4次調査－』多賀城市文化財調査報告書第80集 2005

第2図 開発計画図及び調査区（トレンチ）配置図





1 トレンチ（南より）



2 トレンチ（南より）



3 トレンチ（北より）



4 トレンチ（東より）



5 トレンチ（北より）



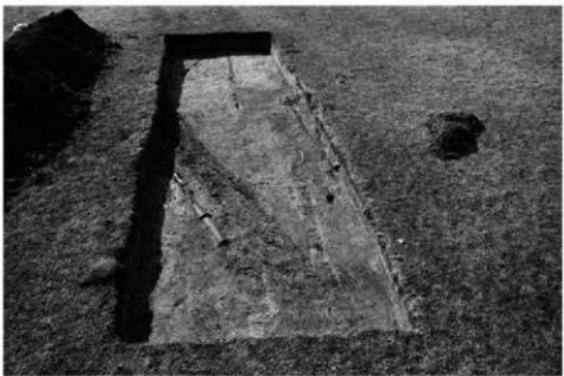
6 トレンチ（南より）



7 トレンチ（南より）



8 トレンチ（南より）



10 トレンチ（東より）



11トレンチ（西より）



12トレンチ（東より）



13トレンチ（西より）



14トレンチ（南より）



15トレンチ（北より）



16トレンチ（南より）

XIII 高崎遺跡第103次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、東田中1丁目地内における宅地造成工事に伴う試掘・確認調査である。平成27年3月に、地権者より高崎遺跡の南端部に位置する当該地における宅地造成工事計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。当該地は、緩やかな丘陵部に立地する畠地であるが、周囲は住宅地として開発が進んでいる。計画では、対象地のほぼ中央に東西方向の道路を設けるほか、東端部を除くほぼ全域において切土を行うことから、遺跡への影響が懸念された。そのため、遺構の有無を確認し、存在する場合はその分布状況や構成を把握するとともに、本発掘調査にかかる事業量を積算するため試掘・確認調査を実施することで協議を進めた。その結果、同意が得られたことから、10月29日に調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、11月9日より現地調査を開始した。

調査対象地は、東端部を除く全体の約8割が高台となっており、東側の低地との比高は約3mである。調査においては、はじめに高台部に幅2m、長さ約20mの細長い調査区を東西方向に4箇所（1～4トレンチ）設定して掘り下げを行った。掘り下げにあたっては、地形上の制約から重機を搬入できなかったため、作業員を動員して人力で行った。その結果、いずれのトレンチにおいても、厚さ15～20cmの表土を除去すると直接岩盤が現れた。さらに、トレンチ西端から約15m東側の南北ラインで、旧地形が東側に急激に落ち込むことを確認した。これらのことより、対象地の西半部においては、なだらかな丘陵を掘削して平坦地に造成し、その掘削土を使って東側の斜面に盛土し、平坦地を拡大していることがわかった。次に、北側の1・2トレンチの落ち際付近に地山土がわずかに残っていたことから精査したところ、数個の柱穴を検出した。そのため、落ち際ライン上に、南北方向の調査区（5～8トレンチ）を設定した。これらの掘り下げの結果、各トレンチで柱穴、溝跡、土壤を検出し、落ち際付近に限定されるものの南北の範囲には広く遺構が残っていることを確認した。その後、東側の低地部において「T」形に調査区（9トレンチ）を設定し掘り下げを行い、旧地形が東側に落ちる斜面であり、ここでも後世の掘削が行われていることを確認した。遺構・遺物は発見されなかつた。これらの調査区の写真撮影、平面図作成の後、埋め戻しを行い、12月18日に調査を終了した。



第1図 調査区位置図

2 調査成果

調査対象地高台部に設定した1～7トレンチの、旧地形の落ち際ライン付近で柱穴、溝跡、土壌を発見した。しかし、これより西側は、掘り下げの状況などからみて後世の削平によって遺構は失われていると考えられた。また、調査対象地東端付近の低地部に設定した9トレンチでも、遺構・遺物は発見されなかつた。

発見した遺構のうち、柱穴は対象地北半部での分布が顕著である。各柱穴の平面形は概ね円形で、規模は直径20～30cmと40～60cmのものに大きく分けられる。後者には、径約15cmの柱痕跡が認められるものもある。また、2～4個の柱穴が直線状に並ぶ状況が数箇所で確認できる。

溝跡は、2・5トレンチで2条発見した。いずれも南北方向の小規模なものであり、上部での削平が著しい。5トレンチ北側検出のものでは、土師器坏が埋まっている状況を確認した。

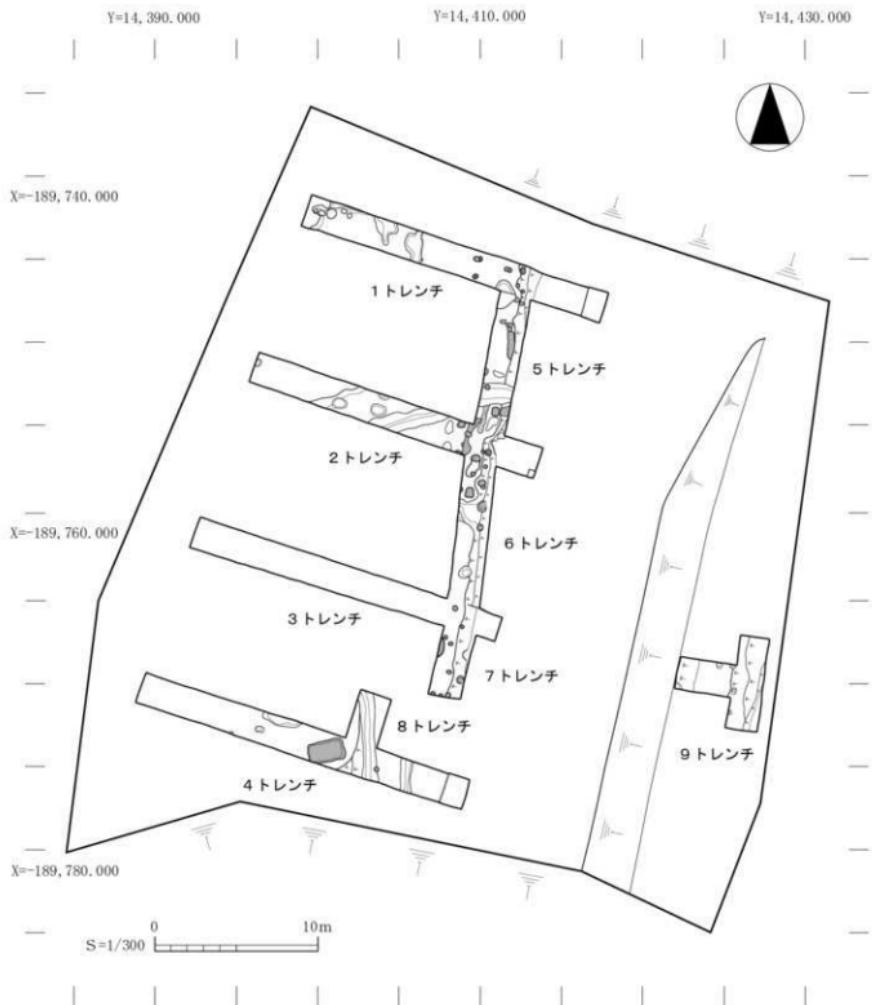
土壌は、小規模なものが調査対象地中央付近で、大規模なものが南側で認められる。前者については、平面プランが不明確なものもみられる。また、後のうち4トレンチ検出のものは、平面形が長方形を呈し、規模は東西約1.3m、南北約2.2mである。埋土はしまりが弱い。

遺物は、表土及び盛土から出土しており、古代の土師器、須恵器、瓦、近世以降の陶磁器がある。いずれも破片である。

3 まとめ

本調査では、遺構の掘り下げを行っていないため、各遺構の年代等の詳細は把握していない。よって、分布状況などから調査成果をまとめると以下のようになる。

- (1) 調査対象地中央付近の限られた範囲で、柱穴、溝跡、土壌を発見した。
- (2) 柱穴は、直線状に規則性をもって並ぶものも認められることから、建物跡や柵跡などの存在が推定される。
- (3) 柱穴には、明瞭に柱痕跡が認められるものがあることなどから、年代については古代にさかのぼる可能性もある。



第2図 調査区(トレンチ)配置図



高台部調査前状況
(南より)



低地部調査前状況
(東より)



1・5トレンチ
(東より)



2・5 トレンチ
(東より)



3・7 トレンチ
(東より)



4・8 トレンチ
(東より)



5~7 レンチ
(北より)



5~7 レンチ
(南より)



9 レンチ
(西より)

XIV 高崎遺跡第104次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、高崎二丁目地内における個人住宅建設に伴うものである。平成27年10月22日に、地権者より当該地区における住宅建設と埋蔵文化財とのかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、住宅部の基礎工事として径20cmの柱改良杭を3mの深さまで29本施すものでものであった。当該区周辺では、現地表面から50～60cmで遺構を発見していることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そこで、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、計画以外の工法では建物を支えるための十分な強度を得られないことから、記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。その後11月20日に地権者より、調査に関わる依頼・承諾書の提出を受けて現地調査に至ったものである。

調査は11月24日より開始した。住宅部分に調査区を設定し、表土掘削を行ったが、遺構・遺物は発見されなかった。写真撮影後、直ちに調査区範囲・土層模式図を作成し、調査を終了した。

2 調査成果

(1) 層序

今回の調査では、現表土（盛土）も含め2層の堆積を確認した。

I層 現代の盛土であり、厚さは0.9～1mである。

II層 黒色の砂層であり、厚さは50～60cmである。

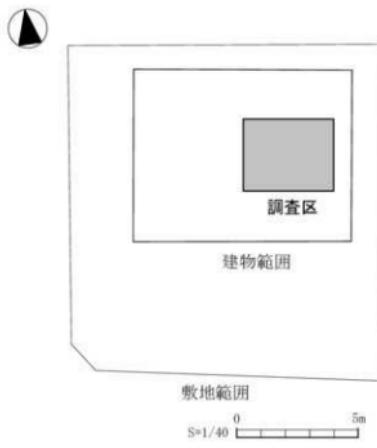
III層 基盤層（岩盤）

3 まとめ

調査の結果、遺構・遺物は発見できなかった。当該区周辺は、後世の掘削によって地形が改変されていたことを確認した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



調査区全景（西より）

XV 高崎遺跡第105次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、個人住宅新築に伴う確認調査である。平成27年11月14日に当該地における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。住宅部の基礎工事として現地表より63cmの深さまで掘削を行う計画であり、遺跡への影響が懸念された。12月21日付で地権者より埋蔵文化財発掘の依頼書が提出され、これを受けた確認調査を実施することとなった。

調査は平成27年12月24日に実施した。計画地の中央付近に幅4m、長さ1.4mの調査区を設定し、さらに北側の状況を確認するため、幅50cm、長さ2.6mの南北に長いトレンチで調査区を拡張した。表土が約10cmと浅いものであったため、作業は表土掘削から全て人力により行った。表土を除去した時点で遺構面となる基盤層が検出されたことから、この面で精査・遺構確認を行った。その結果、調査区北部において、堆積土層の変わり目が明瞭に確認された。かつて北に向かって下る傾斜地であったことが推測され、調査地の南半部を削平し、さらに北半部の斜面部分を盛土して平坦面を造成していることが判った。

盛土中からは現代のタイルやコンクリート塊などが出土し、造成は現代のものであることが判明した。遺構・遺物は発見されなかった。全景写真を撮影し、人力による埋め戻しを行い、器材等撤収し12月24日中にすべての調査を完了した。



第1図 調査区位置図



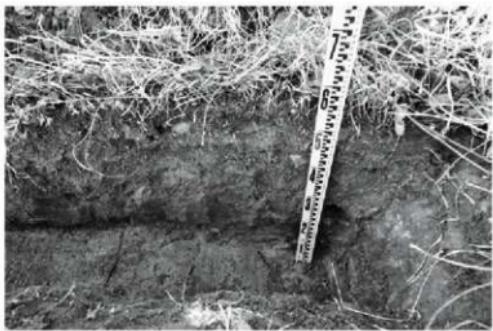
第2図 調査区全体図



調査区全景（南より）



調査地遠景（南東より）



調査区北端部堆積土層（東より）

XVI 留ヶ谷遺跡第7次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、集合住宅新築に伴う本発掘調査である。平成27年3月13日に当該地における宅地造成工事と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画は丘陵地を切土し、軸体部の基礎に柱状改良を施工する内容であり、遺跡への影響が懸念された。3月27日付で地権者より埋蔵文化財発掘の依頼書が提出され、これを受けて確認調査を実施することとなった。

調査は平成27年7月13日から8月13日において実施した。遺跡に影響を与えない重機の搬入経路を確保することが難しく、作業は表土掘削から全て人力により行った。表土を除去した時点で遺構面となる基盤層が検出されたことから、この面で精査・遺構確認を行った。その後、確認した遺構については順次部分的な裁ち割りを行い、写真撮影・測量等を実施した。平面図に関しては、測量委託によって与えられた国土座標値を基に、全て光波測距儀を用いた3次元測量を行った。断面図は基準杭に移設された標高値を基に、オートレベルを用いて手作業により方眼紙上へ測点をプロットする方法を探った。7月31日に全景写真を撮影し、8月3日より人力による埋め戻しを開始、8月13日に器材等撤収し本調査を完了した。



第1図 調査区位置図



第2図 留ヶ谷遺跡調査地点

2 発見した遺構・遺物

本調査地点は中世～近世の館跡と目される地点であり、丘陵中腹の尾根線上に位置している。発見した遺構は、溝跡3条（SD115～117）のほか、落ち込み遺構（SX118）、積土層（SX119）、ピット2基である。

S D115溝跡（第4図）

【位置・形態】調査地中央を南北に延びる尾根から東に降りきったところで、尾根線に沿う状態で発見した。3区・4区・9区で発見したものがそれぞれ同一の溝跡と考えられる。

【重複】SX118と重複し、それよりも古い。

【方向・規模】方向は北で20度東に偏する。規模は長さ16.4m以上、幅95cm、深さは検出面から15cmを測る。尾根の頂部からの深さでは95cmとなる。

【遺物】出土していない。

S D116溝跡（第4図）

【位置・形態】3区東部を南北に延びる状態で発見したことから、南北に調査区を拡張（6区）したところ、北部では弧を描いて西に振れる様子が窺えた。後世の削平により、北端部、南端部とも延長を失っている。

【重複】ほかの遺構との重複はない。

【方向・規模】方向は北で25度西に偏する。規模は長さ10.3m以上、幅100cm、深さは検出面から20cmを測る。

【遺物】土師器が出土している。

S D117溝跡（第4図）

【位置・形態】2区西部を南北に延びる状態で発見した。

【重複】ほかの遺構との重複はない。

【方向・規模】方向は北で30度東に偏する。規模は長さ1.8m以上、幅120cmを測る。

【遺物】出土していない。

S X118（第4図）

【位置・形態】1区北部で発見した。北に向かって落ち込み、北端部は現代の削平により失われている。

【重複】SD115と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は北で45度西に偏する。規模は長さ5.8m以上、幅85cm以上、深さは検出面から140cmを測る。

【遺物】出土していない。

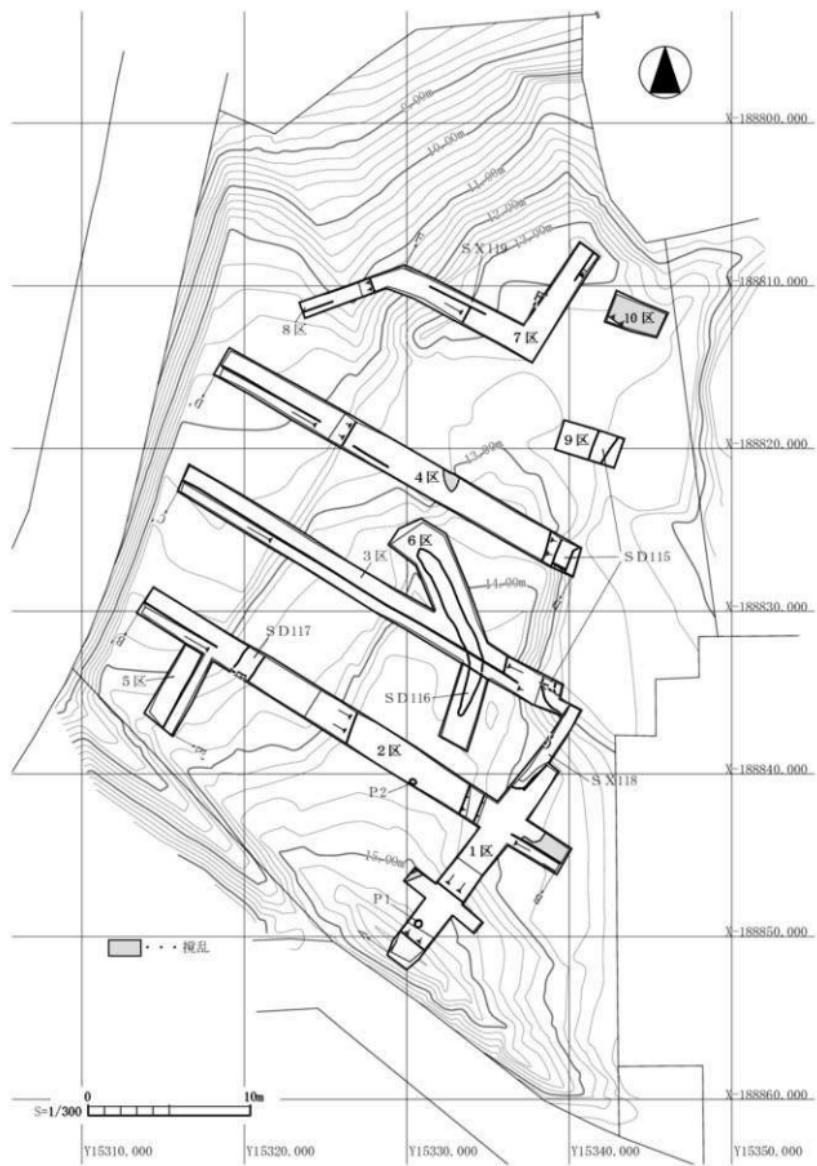
S X119（第4・5図）

【位置・形態】7区中央付近で発見した。人為的な積土を確認したものである。

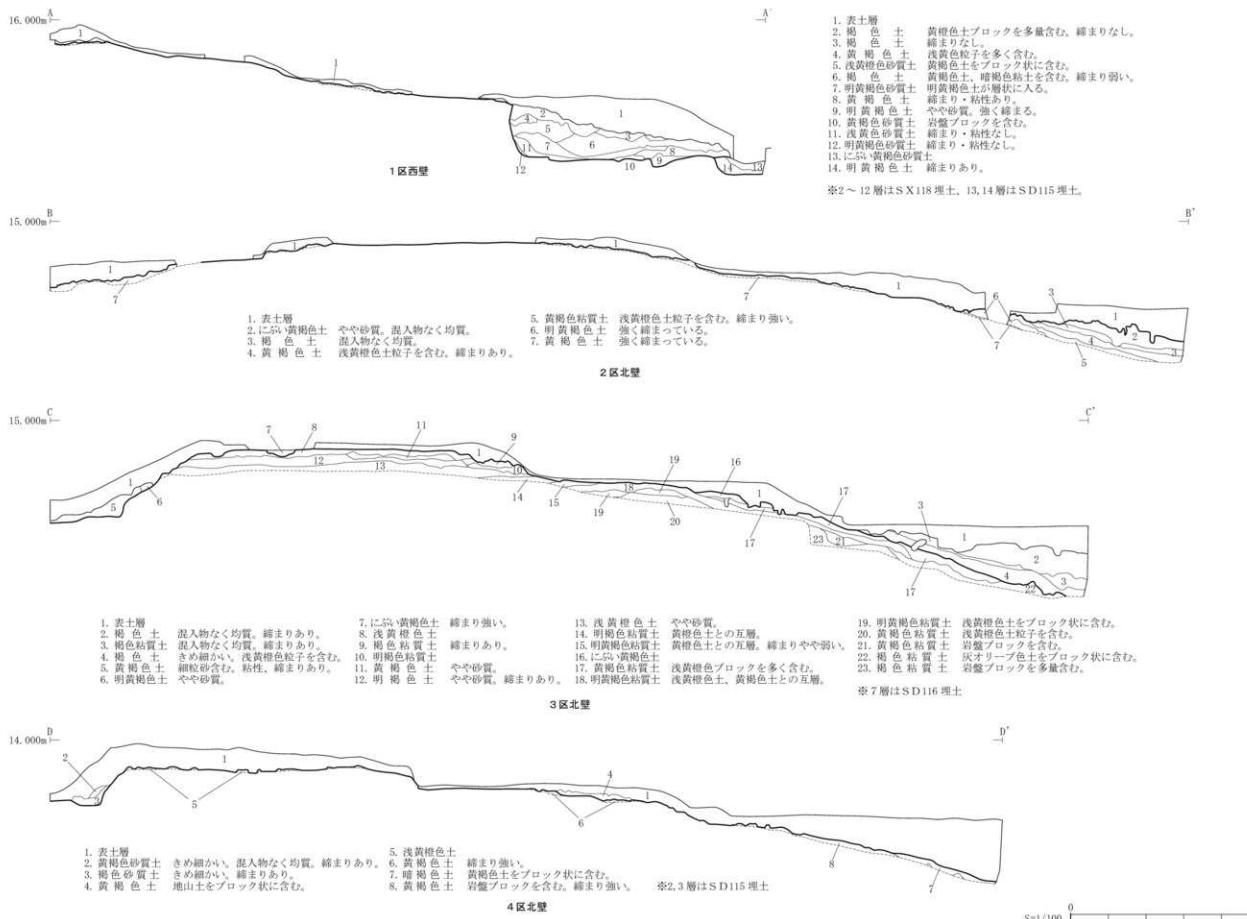
【重複】ほかの遺構との重複はない。

【方向・規模】南北方向に延びるものと思われるが、7区北端部では確認されなかった。規模は長さ1.5m以上、幅5.2m、積土の厚さは70cmを測るもので、斜面地を埋め立て平坦地を拡充する目的であったものと思われる。

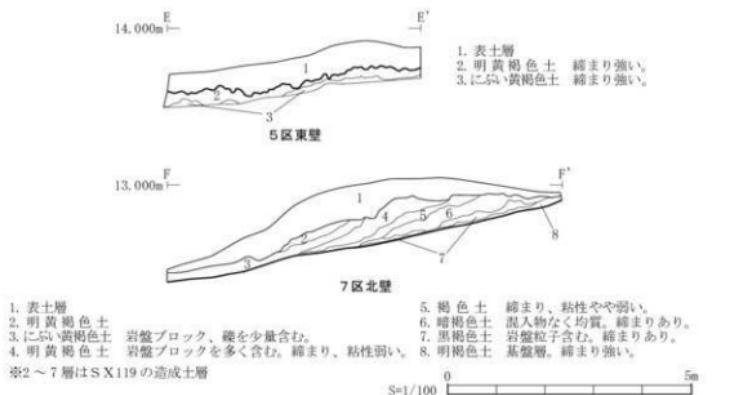
【遺物】最下層より江戸時代末期に比定される陶器碗（第6図）が出土している。



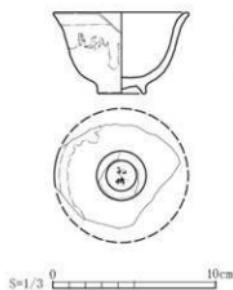
第3図 遺構全体図



第4図 1～4区土層断面図



第5図 5・7区堆積土層図



第6図 SX119出土遺物

| SX 119 出土遺物観察表 | | | | | | | (単位: cm) | |
|----------------|----|----|------|------------|-------------|-------------|-------------|------|
| 番号 | 種別 | 器種 | 出土層位 | 特徴 | 口径 (復元径) | 底径 (復元径) | 器高 (残存高) | 登録番号 |
| 1 | 陶器 | 碗 | 第6層 | 内外とも灰釉浸け掛け | (8.2) | 2.8 | 5.0 | R1 |

3まとめ

今回の調査は丘陵地ということもあってか、遺構面を構成する基盤層の状況が区域によって異なっており、馬の背状の高まり部分では浅黄褐色土、その西側の斜面部分では泥岩塊を含む黄褐色ローム土、調査地北部ではやや砂質の黄褐色土で構成されていた。特に西側では、泥岩塊を含むことから、基盤層となり得る自然の堆積土であるか判然としなかった。このためサブトレーンチを設定しさらに下層の状況を確認したが、自然堆積か人為的な造成土か積極的な判断

はつかず、後に実施する本発掘調査によって明らかにすることになった。また、現況地形で確認できていた調査地南辺・北辺の土壌状の高まりは、現代の盛土層であることが判った。今回は確認調査ということもあり検出遺構の年代はいずれも明らかでないが、SD116からは古代の須恵器碗が1点出土しており、SD116は締まり良好で安定した埋土の土質からSD115・117に先行する時期のものと推測される。SD115・117からは遺物は出土していないが、SD115は地形を利用して開削している状況や、深さの規模が馬の背状の高まりから比高差1mほどもある状況を考慮すると、第1次調査で発見された堀や土塁に連なる館跡関連遺構の可能性が考えられる。

参考文献

- 多賀城市教育委員会「留ヶ谷遺跡－第1・3次調査報告書－」多賀城市文化財調査報告書第48集 1998
- 多賀城市教育委員会「(2) 留ヶ谷遺跡(第2次調査)」『年報1 昭和61年度』多賀城市文化財調査報告書第14集 1987
- 多賀城市教育委員会「III 留ヶ谷遺跡第5次調査」『小沢原遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第92集 2008
- 多賀城市教育委員会「II 留ヶ谷遺跡第6次調査」『多賀城市内の遺跡1』多賀城市文化財調査報告書第112集 2013



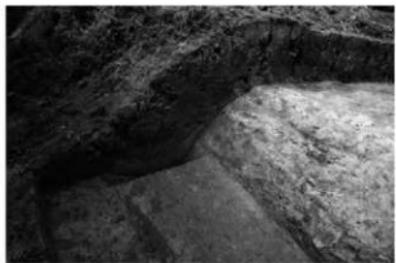
調査区全景（南より）



調査区全景（北西より）



調査区全景（北より）



4区 SD 115 (北東より)



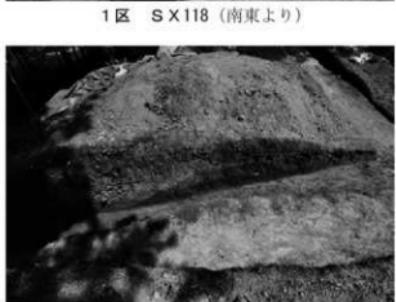
9区 SD 115 (南より)



6区 SD 116 (南東より)



SX 118 (北東より)



SX 119 (南より)



陶器碗 (SX 119)

報告書抄録

| ふりがな | たがじょうしないのいせき 2 | | | | | | | |
|-----------------|--|-------|-------|-----------|------------|-----------------------|-------------------|---------|
| 書名 | 多賀城市内の遺跡 2 | | | | | | | |
| 副書名 | 平成27年度ほか発掘調査報告書 新田遺跡 山王遺跡 市川橋遺跡 西沢遺跡 高崎遺跡 留ヶ谷遺跡 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 多賀城市文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第127集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 武田健市、石川俊英、島田敬、相澤清利、熊谷満、畠山未津留、村上詩乃 | | | | | | | |
| 編集機関 | 多賀城市埋蔵文化財調査センター | | | | | | | |
| 所在地 | 〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 Tel : 022-368-0134 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2016年3月29日 | | | | | | | |
| 所収遺跡 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 新田遺跡 (第103次) | 宮城県多賀城市新田字後27-2 | 04209 | 18012 | 38度18分01秒 | 140度57分25秒 | 20150527～ 20150625 | 55m ² | 個人住宅建設 |
| 新田遺跡 (第105次) | 宮城県多賀城市新田字新後11、11-2 | 04209 | 18012 | 38度17分59秒 | 140度57分44秒 | 20150929～ 20151013 | 97m ² | 福祉施設建設 |
| 新田遺跡 (第106次) | 宮城県多賀城市新田字北14、14-1外 | 04209 | 18012 | 38度17分51秒 | 140度57分45秒 | 20151104～ 20151123 | 487m ² | 宅地造成 |
| 山王遺跡 (第151次) | 宮城県多賀城市南宮字八幡143-2 | 04209 | 18013 | 38度18分02秒 | 140度58分47秒 | 20150827～ 20151027 | 31m ² | 個人住宅建設 |
| 山王遺跡 (第153次) | 宮城県多賀城市山王字山王四区 191-6、191-9 | 04209 | 18013 | 38度17分44秒 | 140度58分28秒 | 20150928～ 20151019 | 32m ² | 共同住宅建設 |
| 山王遺跡 (第155次) | 宮城県多賀城市南宮字町48の一部 | 04209 | 18013 | 38度18分03秒 | 140度58分33秒 | 20151130～ 20151218 | 89m ² | 個人住宅建設 |
| 山王遺跡 (第156次) | 宮城県多賀城市山王字山王二区 202-1 | 04209 | 18013 | 38度17分47秒 | 140度58分32秒 | 20151207～ 20151219 | 34m ² | 一戸建住宅建設 |
| 市川橋遺跡 (第91次) | 宮城県多賀城市城南二丁目11-5 | 04209 | 18008 | 38度17分51秒 | 140度59分36秒 | 20151104～ 20151125 | 34m ² | 個人住宅建設 |
| 西沢遺跡 (第26次) | 宮城県多賀城市浮島字西沢90番1 | 04209 | 18017 | 38度18分25秒 | 140度59分36秒 | 20150713 | 40m ² | 建売住宅建設 |
| 西沢遺跡 (第27次) | 宮城県多賀城市浮島字沢前 21-1外 | 04209 | 18017 | 38度18分19秒 | 140度59分37秒 | 20151114 | 15m ² | 賃貸住宅建設 |
| 高崎遺跡 (第101次) | 宮城県多賀城市高崎一丁目103-1 | 04209 | 18018 | 38度18分01秒 | 141度0分06秒 | 20150303～ 20150327 | 370m ² | 宅地造成 |
| 高崎遺跡 (第103次) | 宮城県多賀城市東田中一丁目 186-1、187-1一部 | 04209 | 18018 | 38度17分01秒 | 140度59分41秒 | 20151109～ 20151218 | 223m ² | 宅地造成 |
| 高崎遺跡 (第104次) | 宮城県多賀城市高崎二丁目231-14 | 04209 | 18018 | 38度17分48秒 | 140度59分35秒 | 20151124 | 12m ² | 個人住宅建設 |
| 高崎遺跡 (第105次) | 宮城県多賀城市留ヶ谷一丁目137-13 | 04209 | 18018 | 38度17分57秒 | 141度0分18秒 | 20151214 | 7m ² | 共同住宅建設 |
| 留ヶ谷遺跡 (第7次) | 宮城県多賀城市留ヶ谷一丁目15-1 | 04209 | 18047 | 38度18分06秒 | 141度0分18秒 | 20150713～ 20150813 | 290m ² | 集合住宅建設 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|-----------------|-------------------------------------|---------|--------------|-----------------|--------|
| 新田遺跡 (第103次) | 集落・屋敷 | 古代 | 竪穴住居跡、溝跡 | 土師器・須恵器・瓦 | |
| 新田遺跡 (第105次) | 集落・屋敷 | 中世 | 溝跡 | 土師器 | |
| 新田遺跡 (第106次) | 集落・屋敷 | 古代・中世 | 小溝群・溝跡 | — | |
| 山王遺跡 (第151次) | 集落・都市 | 古代 | 道路側溝・掘立柱建物跡 | 土師器・須恵器 | 西6南北道路 |
| 山王遺跡 (第153次) | 集落・都市 | 古代 | 小溝群 | 土師器・須恵器 | |
| 山王遺跡 (第155次) | 集落・都市 | 古代 | 柱跡・溝跡・土壤 | 土師器・須恵系土器 | |
| 山王遺跡 (第156次) | 集落・都市 | 古代 | 柱跡・溝跡・土壤 | 土師器・須恵器・陶磁器 | |
| 市川橋遺跡 (第91次) | 集落・都市 | 古代 | 掘立柱建物跡・溝跡・土壤 | 土師器・須恵器 | |
| 西沢遺跡 (第26次) | 集落 | | — | — | |
| 西沢遺跡 (第27次) | 集落 | | — | — | |
| 高崎遺跡 (第101次) | 集落 | 古代以降 | 柱跡・溝跡・土壤 | 土師器・須恵器・須恵系土器・瓦 | |
| 高崎遺跡 (第103次) | 集落 | | 柱跡 | 土師器・須恵器・瓦 | |
| 高崎遺跡 (第104次) | 集落 | | — | — | |
| 高崎遺跡 (第105次) | 集落 | | — | — | |
| 留ヶ谷遺跡 (第7次) | 集落 | 古代・中世以降 | 溝跡 | 陶器 | |
| 要約 | 新田遺跡第103次調査では、古代の竪穴住居跡、溝跡等を発見した。 | | | | |
| | 新田遺跡第105次調査では、中世の溝跡等を発見した。 | | | | |
| | 新田遺跡第106次調査では、古代の小溝群、中世の溝跡を発見した。 | | | | |
| | 山王遺跡第151次調査では、古代の道路側溝・掘立柱建物跡を発見した。 | | | | |
| | 山王遺跡第152次調査では、古代の小溝群を発見した。 | | | | |
| | 山王遺跡第153次調査では、古代の柱跡・溝跡・土壤を発見した。 | | | | |
| | 山王遺跡第155次調査では、古代の柱跡・溝跡・土壤を発見した。 | | | | |
| | 市川橋遺跡第91次調査では、古代の掘立柱建物跡・溝跡・土壤を発見した。 | | | | |
| | 西沢遺跡第26次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。 | | | | |
| | 西沢遺跡第27次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。 | | | | |
| | 高崎遺跡第101次調査では、古代以降の柱跡・溝跡・土壤を発見した。 | | | | |
| | 高崎遺跡第103次調査では、古代以降の柱跡を発見した。 | | | | |
| | 高崎遺跡第104次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。 | | | | |
| | 高崎遺跡第105次調査では、遺構・遺物は発見できなかった。 | | | | |
| | 留ヶ谷遺跡第7次調査では、古代・中世以降の溝跡を発見した。 | | | | |

多賀城市文化財調査報告書第127集

多賀城市内の遺跡 2

—平成27年度ほか発掘調査報告書—

平成28年3月29日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

宮城県多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022)368-0134

発行 多賀城市教育委員会

宮城県多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022)368-1141

印刷 株式会社 工陽社

宮城県塩竈市尾島町8番5号

電話 (022)365-1151

